
ダークマジシャン-2nd stage-

霸王樹

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

ダークマジシャン - 2nd stage -

【Zコード】

Z7509X

【作者名】

霸王樹

【あらすじ】

主人公のザックスは英國系日本人であり幼いころにイギリスの武器として体に特殊能力を組み込まれていた。ザックスとミイナにとつてイギリスは危険とボスに言われ2人は日本へ引っ越しすることになった。しかし、そんな情報はすぐに漏れていて日本で待っていたのは術者狩りというザックスたちを狙う組織だった。そんな中ザックスとミイナは日本で実験された術者4人と出会う。ザックスたちの運命はどうなるのか?

第0話（第30話）プロローグ

プロローグ。

下記は1期のネタバレがあるので読んでいない人は

<http://nocode.syosetu.com/n8344w/>

舞台はイギリス。

主人公のザックスはイギリスの戦争の兵器のため幼いころに体に特殊能力を組み込まれた。戦争により亡き恋人マリがザックスの身代わりで死んだあとザックスは旅を成功させればマリに会えるということを知り旅を始めた。

最初はキリヤという幼馴染と始めたが色々人を助けていくとルメリ、ティト、ミイナと一緒に旅をすることになったがそこには術者狩りというザックスたち術者の力を悪用に使用するため必要とする人物が沢山いる。

そんな術者狩りを倒していきながらもザックスは無事に亡き恋人マリに出会うことが出来た。

辛い別れの中ザックスたちは村に変えるとお互い自分たちの道を進むことにした。

そんな中ザックスとミイナはボスの薦めにより安全な日本へ行くこ

とになった。

そこには新しい仲間や出会い。

そしてザックスたちを待っているものとは・・・

まもなく投稿開始!!

第1話（31話） 新たなる日々（前書き）

この小説に出る登場人物の名前は実際の団体名・個人名とは一切関係ありません。

今回も小説を読んでいただきありがとうございます。もしよかつたら、評価・感想・お気に入りを宜しくお願ひします。

はーい第2期もやっていきまーす。 約分1-1月の中旬ぐらいで終わるかな・・・

第1部読んでいない人は第1部からがいいと思います。詳しくはプロローグで！！

第1話（31話） 新たなる日々

1話

ロンドン・ヒースロー空港

「それじゃあ気を付けてね。ヒサビスを連絡してよ。あ、あとのスマートフォンの使い方大丈夫?」

ヒキリヤは聞いてくる。

「大丈夫なんじゃない?」
と俺は適当に答えると

「大丈夫だよ! キリヤ もう、私が使いこなしているから」

ヒマヤナは言ひ。

「ザックスさん。決してヒマヤナさんには手を出さないよ!」
とティートは注意深く言ひ。

「わかつてるつて! そんなことあるわけないだろ!」
と答える。

「ザックスさん、体の方には気を付けて!」
ヒルメリは言ひ。

「ああありがとう。」

「ザックス！ あんたロリコンとは知っていたけど一緒に2人だけで
クラスとなると結構心配だな・・・」
とマリヤは言つ。

「つるせえな。 大丈夫だつて言つてるだろ。」

・・・

「それじゃあいってきまーす」
とミイナは言つ。

「じゃあな おまえら〜」

と俺はいい パスポートコントロールをくぐつていった。

そうこれは1か月前だつた。

「ザックス。 よく帰つてきたな
とボスは言つ。

「ありがとよ、ボスさん。 おかげであいつにも会えることが出来
て俺は良かった。」

「そうか、ならばよかつた。 しかし、今回お前さんの行動で世界中
は君を欲しがつている。

特にこのイギリスはな、だからザックスに私は任務を与える。

そう、日本でしばらく暮らしておくれ、手続きは俺の知り合いの大

学の教授に任せた。

引っ越しさは明後日から行つ。そして悪いがミーナも一緒にだ。あいつの力もどうやら狙つてこぬらし。」

「はいはー。」

と俺はこつもの癖で返事してしまつ。

「つておーーな・・・なんていつた? 日本? 日本へ引っ越し? しかも引っ越しさは明後日から? え? しかも ワイセマニアつて・・・ エ? おれとミーナが日本で暮らすの? 」

「ああそつだが?」

「ええ? なんで?」

「ああ大丈夫、君とミーナは日本の学校に行つてもうつくなる、頑張るんだぞ。」

「話聞け」

家

「ただいま。」

「おかえりーザックス。聞いたよ聞いた。私達一緒に日本に行くんだよね?」

「お前、どこから、 、 、 」

「 今日ボスに聞いたの 私楽しみ 」

・ ・ ・

・ ・ ・

という訳で俺たちは飛行機の中。

日本へ向かっていた。

成田空港。

「うわあすげえ 全部日本語だ・ ・ ・

とザックスは言ひ。

「す、ご、い、す、ご、い！日本人ばつかだ！」

とミィイナは言ひ。

そうすると後ろから女人がやつてきた。

「すみません、海藤君と吉川さん？」

俺はあまり慣れてない名前で呼ばれたので少し反応が遅かった。

・ ・ ・

大学研究室。

「はじめまして、私は特殊能力研究の教授 春田 南 あなた達のお世話をしていくことにもなるわ。」

「あ、俺は ザ・・・じゃなくて 海藤 考樹です。」

「私は吉川 由紀です。」

「そう、それでいいの」と春田は言つ。

「これからは学校にも行くことになるからなるべくそつちの名前を使ってね。

それともう一つ約束してほしいことがあるの・・・

・・・

わたしは普通の学校に行っている女子高校生の2年生。

でも私は普通じゃないの。少し変わっていて・・・

実は特殊能力を持っていたりするの

・・・

・・・

「おはよー 美月 今日も元氣いー?」

と話しかけてくる友達の優香。

私は 小鳥坂 美月 よく小鳥ーとかも呼ばれる。

れいちゃんも説明したけれど 普通の高校に通っている女子校生
今日は新学期。新しい転校生とかも来るから楽しみみてなわけだつ
たが、まさかーなるとは思つていなかつた。

学校

「えーーと名簿と名簿」

新しくクラスも変わつたのできちんと見ておいた。

そこを見たい」とのない名前があつたことに気付いた。

「海藤 考樹? (かこじゅ じゅわく) 」のひと転校生かしり・・・

」

「みづあー 何見てるのー まさか転校生を狙つてるの?」

「な・・・なに言つてるのよ? まさかそんなことするわけないで
しょ!」

「だよね～ 実は、その転校生って超イケメンらしいよ。」「え？」

まさか転校生が特殊能力を持つているなんてじりすー。

アパート

「よし、お前はこここの学校にいくんだぞ。多分イギリスの時と変わりないともうがな。」
とザックスは言つ。

「うん、わかつた」

とミイナはいい、家を出て行つた。

・・・

ザックスが学校に向かう途中。

「しかし、聞いていたが、日本の学校は歩いたり自転車を使って登校するのか・・・」
という。

その時かすかに、こんな声を聴いた。

「ザックス・アンドレス の身元を確認

しかし、俺は気のせいだと思い無視していった。

・・・

学校

キーンゴーンカーンゴーン

とチャイムが鳴る。

俺は後ろの方の真ん中の席に座っていた。

すると、後ろに座っている男に声をかけられた。

「君が海藤くん？はじめましてだね。」
と優しく声を掛けられる。

「あ、ああ海藤です。」

と答える。

「どこの高校から来たの？」

と聞かれるが答えれない。

「えっと・・・遠い方の・・・田舎の高校かな・・・」
と適当に俺は答えた。

「そつか。俺は斎藤 楓太 ようじく。」

「ああ、ようじく」

キーンゴーンカーンゴーン

ともう一度チャイムが鳴る。

「はい、今日から担任の橋澤 はしづわみゆき 美由紀です。よろしくです。」
と担任の女の先生が言つ。

．．．

キーンコーンカーンコーン

とチャイムが鳴り今日は始業式だったので半日で終わった。

俺はそのあと先生に呼び出されいろいろと学校を説明してもらつた
後に下駄箱へと向かつた。

そして靴を履きかえていた。その時

「ちよっと、いいかしら。」

と声を掛けられた。よく覚えていないが、なんかクラスにいたよう
な顔だった。

「今日、一緒に帰つてもいいかしら。」

と聞かれた。

「なんですか? いきなり逆ナンパですか?」

と言つ

「何を言つてゐるの？ 妄想し過ぎやうに。」
と答えられた。

・・・・

そして俺とそこいつは一緒に帰つていた。

「とこりでなんだ？ 話つて。」

「ああ話ね。まず自己紹介しないと。私は小鳥坂 美月。あなたは
海藤 考樹だよね？」

「ああそつだが？」

「そりへ、ならOKだわ。じゃあ单刀直入に聞くわ。」

「おう」

「あんた、特殊能力の持ち主だよね？」

「特殊能力？ なんだそれ？ なんか物を浮かばしたりとか？ そん
なのできねえよ」

「あんた隠しても無駄わよ。無駄！」

「なんで隠すんだよ？ そんなもの 言つてみてくれよ

「そんなの決まつてゐるぢやない……あれ……あれ……あれわ……」

「どうしたんだいきなり」と俺が聞いた瞬間、小鳥坂は俺をつかんで走って行った。

・・・

「なんだよ、急に」と俺は聞く。

「あんたね・・・大丈夫かしら。・・・ あれは術者狩り（マジシャン・ハンター）よ・・・

「術者狩りだと？ 日本にもいるのか？」

「ええ、でもあいづらは撤退したはずだわ。 あついけない、この後塾があるんだつた・・・

あんたも術者狩りには気をつけなさいよ。」

と言つて帰つて行つた。

俺もすぐに家へと戻つた。

・・・

家の前に着くとミライナが扉の前で待つてた。

「もお遅かったじゃん！」

「わりいな。俺も遅くなつたんだから。」

と扉を開けようとした時、新聞受けに手紙が入つていて「」ことに気付いた。

「誰からだ？」

と俺は手紙を開けて内容を読んだ。

『宛て：ザックス・アンドレス

お前が「ここに住んでる」とは間違いないだろ？』

もし、お前がザックス・アンドレスなら団地の前の公園に7時に姿を現せ。』

と書いてあった。

「誰から手紙？」

とミイナは聞いてくるが

「ああ教授からだ。」

と俺は「つづく」。

そして7時

公園へと向かつ。

第2話（32話）公園（前書き）

この小説に出る登場人物の名前は実際の団体名・個人名とは一切関係ありません。

今回も小説を読んでいただきありがとうございます。もしよかつたら、評価・感想・お気に入りを宜しくお願ひします。

第2話（32話）公園

俺は公園へ向かった。

すると急に後ろから気配を感じた。

「誰だ！？」

と俺は叫ぶ。

「さすがだな。ザックス・アンドレス。」

と現れたのは一人の男と二人の女だった。

「俺らは今からお前を殺す。」

と男は叫ぶ。

「ちよい待てよー。なんで俺が？お前らは術者狩りか？」

と俺は叫ぶ。

「術者狩りじゃないんだ。ただ、お前に恨みがあるだけだ・・・」

と男は叫びと襲つてくる。

相手は光術師だった。

「お前ら卑怯じゃねえか？ 3VS1はないだろ？おい！」
とザックスは叫ぶ。

「お前が死ぬ」と云は変わりないんだ……」

と男は云ひへ。

「つか……お前ら……怪我してもしらねえぞ……」「ザックスは云ひと3人を吹き飛ばす。

「なんて威力なの……？」

と女は云ひへ。

「ためへり 恨みがあるだらうがなんだらうがしらねえが……」「云つてもらおうじやねえか

とザックスは云ひへ。

「云ひ前に俺らはお前を殺すんだよ……」

ともう一人の男は云い襲つてくる。

「近づくな！」

とザックスは云いその男を飛ばす。

「そんなの……あなたに分かるわけがないじゃない！」

と女は泣きながら云ひへ。

「お前は……俺の姉ちゃんを……」

と男は言つ。

3人とザックスは戦いを止めて3人はザックスに話し始めた。

「当時は術師なんて珍しかつた。 なんで俺たちが術師かというと・
・・日本人がイギリスの技術を使用しようとして俺たちを使つた。
それが俺たち4人だつた。

4人というのは 有理姉ちゃんと俺、裕太と透哉と綾乃だ。」

と裕太は話す。

「おいおい、待てよ・・・ 有理つて・・・まさか・・・
とザックスは言つ。

「そのまさかだよ。 俺の姉ちゃんはお前が知つているマリつてい
うやつだよ。

姉ちゃんは俺たちの中でも強かつたんだ。 術者つて言つても俺たち
4人しかいなかつたんだ。だから術者狩りに狙われてもおかしくな
くいつも4人で行動していたんだ。 学校でもばれないように頑張
つてきたんだ！！

でも5年前に姉ちゃんはイギリスから成功作つて言われて姉ちゃん
はイギリスに送られた。

俺たちは失敗作。 失敗はイギリスに必要とされなかつた。 本当は
俺たちもイギリスに行くはずだつたんだが。」

「私だつて別れたくなかつたもん。」

と綾乃是話し出す。

「有理ちゃんと一緒に生きてこれたのに・・・」

・

「俺たちは姉ちゃんを遠い日本から見守つていた。だけど2年前だつた・・・俺たちはイギリス政府から姉ちゃんは戦死したつて聞いたんだ。もうその時はずっと泣いていたんだよ。もう俺たちは生きていけないと思つていた。

そのあと俺たちは姉ちゃんの墓があるイギリスへと向かつた。

・
・
・

『あれが・・・マリの・・・いや 有理さんの墓よ・・・』

と当時のキリヤが言つ。

『あの・・・お墓の前にいる人は誰ですか?』
と綾乃是聞く。

『・・・・・ あの人は・・・・・』

俺たちは事実を知つた。姉ちゃんは戦死じやなかつたつて。

あのお墓の前にいるやつのために死んだ。あいつが死ぬのを姉ち

やんは犠牲に・・・

俺たちはそいつをずっと憎んでいた。 ザックス・アンドレスを。

俺たちは墓をお参りをするだけのはずだったのに悲しい知らせを聞いただけだった。

『あいつのせいだ・・・ あいつのせいだ・・・ 』
と俺はすつとつぶやいていた。

『ねえ、裕太 あの人・・・ずっと墓の前で泣いていたけど・・・
と綾乃是聞く。

『そりやそりや・・・人の墓の前で笑っていたらぶち殺すところだからな・・・』
と俺は答えた。

そして、先週の事だった。 俺らはお前が日本へ引っ越していくことを知ったんだ。』

と裕太は全て話す。

「すまん・・・ わかってるんだ・・・ 俺も・・・ マリが死んだことは・・・ 全て俺が悪いんだ。

俺も知っているんだよ・・・ あの時俺がもつと強ければ・・・
俺は命を変えてでもしようとしたんだ。

そうだ・・・ いい締めだな。 おい、お前。 俺をこころしてくれえ。

それでいいだろ・・・

とザックスは言つ。

綾乃と透哉は驚く。

そして裕太は

「わかつたよ・・・それで俺らの恨みはなくなる・・・それでいいんだな。」

と言つ。

「ああ」

とザックスは言つ。

「それじゃあ殺させてもらおうか・・・」

と言つと裕太は手を伸ばしたザックスに攻撃をする。

「（やんな・・・うそでしょ・・・）」

と綾乃は思つ。

・・・

・・・

「うう・・・」

トザックスは目を開ける。

「悪いがまだ話は終わっていないんだ・・・」
と裕太は攻撃をわざとはずす。

「俺らはその1週間前にもう一つのことを聞いた。それはお前が姉ちゃんに会うために1年もかけて旅をしていたことをな。俺らは最初それを信じなかつた。でもお前のことは事実だとイギリス政府は証明した。俺らは考え直したんだ お前がどれだけ俺たちの姉ちゃんのことを思つてそこまでしたのか・・・ 命を懸けて姉ちゃんに会つたのか・・・ そんなやつを殺せるわけねえだろ?俺が。

俺達は思つたんだ。姉ちゃんは戦死したんだ。 愛する人のためにな。 だから俺たちはお前にお礼も言いたいんだ。」

と裕太は話す。

「もういいんだ。俺は。所詮ぼろぼろになつた雑巾だ。」

トザックスは言つ。

「まつまつ。術者さんがいっぱいいるみたいですね・・・

とある男が話しかける。

「しまつた。術者狩りだ!
と透哉は言つ。

「日本に術者狩りだと?」

とザックスは言つ

- e n d -

「術者狩りね、その通りだよ。僕は君たちの力をもらいに来たんだからここで死ぬわけにはいかないのさ。」

といつと術者狩りは攻撃をしてくる。

・・・・・

キーン

誰かが攻撃を止めたような音がした。

「確か・・・海藤・・考樹だっかしら・・・早く逃げなさいよ・・・」

と同じクラスメイトの小鳥坂 美月が言つ。

「なんでお前がここに？」
とザックスが言つ。

「理由は後で説明するわ・・・この周りにはたくさんの術者狩りが居るの・・・だから早く違うところへ！」

と美月は言つ。

「わかつた・・・
とザックスが言つと4人は行く。

「あの人は誰なんだ？」
と裕太は走りながら聞く。

「よくわかんねえが俺に術者だろ?とか今日聞いてきたんだよ」

とザックスは言つ。

「（まだ術者がいるのかしら・・・）」
と綾乃是思つ。

「あ、術者狩りが！！」
と透哉は言つ。

「（しまった・・・ミイナが・・・）」
とザックスは思つ。

「お前らー俺はこいつに行くから手分けでいくぞ！」

とザックスは言つ。

「わかった。そつちをよろしく。」

と裕太は言つ。

そしてザックスはアパートへと向かつた。

・・・

「ミイナー！」
とザックスは叫ぶ。

「どうしたのよ？ いきなり？」
とミイナは叫ぶ。

「良かつた。お前…… そうだ…… お前だから今の現状が分か
るはずだ……」
とザックスは叫ぶ。

「それが…… じつに来てから全然予知ができるの…… だか
ら……」
とミイナは叫ぶ。

すると

ド――――ン――！

「誰だ！？」

とザックスは叫ぶ。

「慌てることはないですよ。ザックスとミイナ。 ちょっと待つて
いるだけで体が浮くから……」

と言つと術者狩りは銃で撃つてくれる。

「逃げるぞー！」

とザックスはミイナを抱いてベランダから降りる。

「ちょっとー？ザックスー？なんなの？」

とミイナは聞く。

「俺もわからねエンドー急ぐぞー！」

とザックスは言う。

するとザックスたちは術者狩りに挟み撃ちされた。

「くつそーー行き止まりかーーー！」

とザックスは言う。

「ザックス。私、戦えるわよーーー！」

とミイナは言う。

「わかった。いくぞーーー！」

とザックスは言うと2人は攻撃を始める。

「つあああああ！」

「いけええええ！」

・・・

「なんて数の術者狩りだ・・・・・と裕太は言う。

「さすがザックスたちの情報だけでこんなに集まるなんて・・・」

と綾乃は言つ。

「一人ずつゆっくり時間はなさうな・・・」
と透哉は言つ。

「うわああああ」

と綾乃が叫ぶ

「綾乃ーーー」

と裕太は言つ。

しかしこ人はやられてぼろぼろになる。

「つち・・・なんて強いんだ・・・ いつもと違うじゃないか・・・」

「

と透哉は言つ。

「もういいだらう・・・ ここで眠るんだーーー」

と術者狩りは言つ。

「ドーンーーー

「おこ、テメエら。何しようとしてんだよ。 そんな汚いやり
方で。」

そこにはザックスとミイナがいた。

「おーお前ら。後のやつは俺とミイナで処分しておいたからよ・・・
後はやるんだ・・・」

とザックスは言つ。

「つああああああつあああーー..」

とザックスは叫ぶ。

そして相手の術者狩りは攻撃を止める。

「なるほど、俺の攻撃を止めるとはな・・・じゃあよ これでどうだ? ダークインパクト!..!」
とザックスは攻撃していく。

・・・

そして相手の術者狩りは倒れた。

ザックスは3人を安全な場所に運びミイナは救急処置をした。

「お前ら大丈夫か・・・」
とザックスは3人に声を掛ける。

「ザックス、この人たちは?
とミイナは聞く。

「ああ友人だよ、」Jちゃん。「
とザックスは言つ。

「ほんと、ザックスつて友達作るのはやいねえ
とJちゃんは言つ。

「おいおい、まだ友達は認証してねえぞ。それよりJの小つちや
くてかわいい女の子はお前のなんなんだよ？」
と裕太は聞く。

「可愛いってなによ！」
とJちゃんは言つ。

「ああ、こいつはあれだよ俺んとJのこいつだ。
とザックスは言つ。

「こいつはじゃない！」「

この場所に笑顔がいつの間にかあった。

次の日・・・
「いつできまーす！」「
とJちゃんは言い出でこぐ。
「いつでこーい！」「
とザックスは言つ。

そしてザックスも登校した。

「おはよー海藤君！！ ニュース見たかい？ 大爆発が起きたんだつてよ？」

と同級生の斎藤は言つ。

「そりなんだ。この街も怖いな。」
とザックスは言つ。

教室に向かう途中 会いたくない人に会つてしまつた。

「ちよつとー海藤！！ いっちに来なさいよーー！」
と呼ぶのは小鳥坂だつた。

「あれ。。。美月さん。。。なんでしょうか。。。」
とザックスは言つと引つ張られていつた。

「珍しいな 小鳥坂が男を引つ張るなんて！！」

と斎藤は思つていた。

・ · ·

場所は人目がつかないとこらだつた。

「あのお・・・なんじょうか・・・ 小鳥坂さん。
とザックスは聞く。

「なんじょうかって・・・ あんたそれはないでしょー！」

と小鳥坂の顔が近かつた。

「あんた・・・やっぱり術者だったのね・・・ なんで隠しておくれのよー！ なんか様子がおかしいと思つて後を追つたら問題に巻き込まれてたじやない！」

「あの小鳥坂さん・・・それって・・・ストーカー？」

「バシンー！」

小鳥坂の手が俺の頬に思いつきり当たる。

「なんで私があんたのストーカーなんてしないといけないのよー？ バカでしょ？」
と小鳥坂は言つ。

「それより、お前も術者なんだな・・・」

「絶対に言わないでよー！ 私も・・・あんたのこと言わないから・・・ それとあんたと一緒に同居しているあの小っちゃいのもね。」

「お前、どれだけストーカーしてるんだ・・・」

と言つた瞬間もう一発喰らつてしまつた。

「術者ね～」

と何か目線がしたような気がした。

・・・

学校帰り、門からはカップルが歩いて出て行つてた。

すると向こう側に違う制服の女の子が立つてた。

よく見ると昨日の綾乃だった。

「あ、ザックスさん！！」
と叫んでいる。

俺は綾乃のところへ向かつた。

「あの、ザックスさんいきなりすみません。その昨日はありがとうございました！」

と綾乃は言つ。

「ああ問題ないよ。」

「ところで・・・聞きたいことがあるのですが・・・ザックスさんは有理ちゃんつて・・・恋人だったのですか！？」

とあまりにもの綾乃のストレートの質問に飲んでいたコーラを吹いてしまつた。

「大丈夫ですか！？」

と綾乃は言つ

「大丈夫だよ・・・恋人だつたのかな・・・なんだつたんだろ
う・・・あいつはこんなオレでも支えてくれたからな・・・

人前じゃ強がつていて本当は弱い俺を。 ここまで強くしてくれたからな・・・

あいつが学校で勝負を挑んでなかつたらこんな俺ではなかつただろう。

「（ああ 有理ちゃん、 来た早々に勝負を挑んだんだ。）

「（ううひでザックスさんー！ 有理ちゃんのどこが好きなんですか？）

「またもやストレーントだな・・・ 僕は・・・ あいつがくれた本当の強さが好きなんだ。 変わつてゐるだろ？」

「いや、 そうでもないですよ。 私の有理ちゃんだつたらそんなことしそうだもん・・・ あ、 すみません。 私こつちなんで・・・ あ、 もしよかつたら電話番号を・・・」

「ああ いいよ はー。」

「（スマートフォン・・・ 最新すぎてわからなー。）

と綾乃は思つ。

・・・

「ただこまー」
と俺はミイナヒヽヽ。

「おかえりー」

「なあミイナ学校はどうだった?」

「うん、楽しかったよーーー」

ミイナは言ひ。

「そつかーーーなら大丈夫だなーーー」

「ねえザックスーーー昨日も守つてもひりちやつたねーーー」

「気にスンナつて。。」

とザックスは言ひ。

「今度はーーー私がザックスを守るんだからねーーー」

「それはありがとなーーーでも死んでもひつのはもつ勘弁だからなーーー」

- end -

第3話（33話）都内観光（前書き）

この小説に出る登場人物の名前は実際の団体名・個人名とは一切関係ありません。

今回も小説を読んでいただきありがとうございます。もしよかつたら、評価・感想・お気に入りを宜しくお願ひします。

第3話（33話）都内観光

3話

俺たちは日本に来て3日目を過ぎ、そうとしていた。

一昨日は早速戦いに巻きもまれ大変だったがどうにかばれる事もなく今日も普通どおりに学校へ行つてた。

「海藤！おはよー」

といつもの斎藤が話しかけてくる。

俺たちはなれない学校を2人で入り靴を履き替え教室に入る。

イギリスでも日本の学校にいたがこんなに広くて人数が多いと本当に驚くもんだ。

ほかのみんなは高2だから友達はたくさんいる。でも俺はことしきたばっかりだからまだいない。

まあそれは徐々にどうにかなるだろ？と思いつのクラスに座る。

術者狩りのことだがまだイギリスには報告していない。なぜならミニアも学校になれたことだしこれから引っ越すとかわいそうとも思った。でも本音はあまりみんなに迷惑をかけたくなかつたんだ。

そつやつて考へてるとある女が話しかけてきた。最初は小鳥坂かと思つたがよく見ると違う人だった。

確か近藤真奈だつたか。

「ねえ海藤君、こきなりー」めんね。」

「いやいや、大丈夫だけど。」

「海藤君つてまだ来たばっかりなんでしょう？」

「ああ・・・そりだけど・・・」

「もしよかつたら、土曜日観光に連れて行つてあげるよ。」

「でも悪いんじゃねえか？」

「大丈夫だよ。海藤君のことも知りたいし。」

「わかつたよ。ありがとう」

「うん、じゃあ10時に駅前ね。」

「ああ」

と言つと近藤は自分の席へ戻つた。

後ろからなんか変な視線を感じたが氣のせいか・・・いや氣のせいではなかつた。

小鳥坂が疑わしい目で俺を見つめている。田田があつとあつこつは田田をそらした。

・・・

・・・

キーインゴーンカーンゴーン

学校の終わりのチャイムが響く。

下駄箱に行くと昨日と同じ場所に小鳥坂が居た。しかもとてもお怒りのようだった。

だいたい起つていい理由はわかつた。

「『』・・・『』機嫌いかがでしょつか？・・・」

と俺は聞く。

「あんたね・・・まあいいわ 帰るひよ。」
と小鳥坂は言ひ。

夕日がこの街を照らしている頃、俺と小鳥坂はいつも道を下つていた。

「あんた、あの女どびつこう関係なのよ？」

と小鳥坂は聞いてくる。

「え？ しらねえよ。今日突然声かけられたんだからよ。」

「それもせうよね・・・あんた女運なさそつだから・・・」

と言われる。

「でもあの女は学校でもモテルつて知つてた？」

と小鳥坂に聞かれる。

「知るわけないじゃねえか。だからなんだつていうんだよ。」

「まあいいわ・・・あなたは知らない女でもどこかへ一緒に行くタイプの人なのね・・・」

と小鳥坂はいり

私 こちだから じやあね

と言ひ帰つていいく。

- おしゃれ ! !

と俺は詰うが小鳥坂は走って行つた。

家まであと3分くらいだった。

俺は小鳥坂に勘違にしてせらうては困なと想つた

もちろん好意なんてない。むしろ好意があつてはいけないんだ。俺
は自分に約束したんだから・・・あいつに・・・

A 3x3 grid of nine black dots, arranged in three rows and three columns.

「ただいまー」

と俺は家に入る。ミイナに鍵を持たせておいたから家には入れていた。

「おかえりー」

と奥の寝室から声がする

寝室と言つてもミイナの部屋になつていて。俺はリビングのソファーで寝ている。もうひと部屋もない。

俺たちの家にはトイレ、風呂、リビング、ダイニング、寝室しかないからだ。

部屋はあの時に散らかされたがどうにか昨日2人で片づけた。

「ねえザックス。今日の『』飯は?」

「じゃあさ買い物行こうよー!」
「適当に作るわ。材料もあまりないし。」

「んー。大丈夫だ。どうにかな。」

「ひどいよーザックス!!」

「また明日にしようじやないか。」

「わかった・・・」

と不機嫌そう「ミーハナはこいコビングでテレビを見ていた。

俺は昨日かった野菜を適当に取出し適当に炒めて料理を作った。

そして30分ぐらい料理をしていた。

「ミーハナ、運んでくれ。」

と俺は叫ぶ。

「わかった」

とミーハナはテレビを見ていたのを邪魔されたよつて叫ぶ。

「さすが、男料理だね。」

とミーハナは叫ぶが

「男料理をなめんじゃねえぞ。」

と俺は叫ぶ。

そして俺は食べ終わった後、食器を洗いミーハナを寝かせつけ宿題をし寝よつとしていた。

「近藤か・・・確かに曜日だったけな・・・」

・・・・・

金曜日。

やけに小鳥坂の機嫌が悪かった。やはり気にしているのかと思つたがそつとしておいた。

近藤は俺とすれちがうと笑顔でウインクし「明日楽しみにしてる」という感じな顔をしていた。

そして家に帰り飯を作り・・・いつもより早く寝付いた。

・・・

土曜日。

ミイナは裕太たちの家に預けてもらひことにした。

あいつらはすぐに理解をしてくれたからだしもし何かあつたとき助けることが出来るからだ。

でも、ミイナはせつかぐの土曜日だつていうのに間に会えないのを怒っていた。

そして少し早めに駅前へ着いた。

土日だから通勤ラッシュではなかつたが部活などで使う人で多かつた。

「ごめん、遅くなつた。」

と俺は声を掛ける。

「うんうん。大丈夫だよ、私も今来たところなの。」

と言つ。

「じゃあこの電車に乗つて都心まで行こつか。」

と近藤はいい都心まで2人で行く。

「あの・・・近藤さん・・・」

と俺は声を掛ける。

「真菜でいいわよ。」

「それじゃ・・・真菜・・・今回なんで俺を誘つたの?」
と俺はストレートに質問をする。

「ああ心配してたの突然で? 私、海藤君が早くこの街に慣れても
らいたいなーって思つてね。」

と真菜は言つ。

「そつか・・・ありがとう・・・
と俺は言つ。

「まだ終わつてないよ。おもしろい。」

と真菜は笑いながら言つ。

着いたのは東京駅だった。

「うわあーすごい人の数・・・」
と俺は驚く。

「」の駅は数えきれないほどの電車が止まるからね。」

と真菜は言う。

俺は日本の事をよく知らない。だけど、これはばらしてはいけない
と思い真菜には知ってるふりをして会話をしていた。

2人はそのあと浅草や秋葉原など色々周つていた。 次第に一人は
笑顔で会話をしていくとても楽しかった。

その頃、裕太の家にはミイナが居た。

ミイナは裕太のレースゲームでみんなで楽しんでいた。

「ミイナ。今度はぜつてーまけねえぞーー！」
と裕太は言う。

「私だつて負けないんだからー！」
とミイナは言う。

「私もよー！」
と綾乃も言う。

そしてミイナは突然嫌な予感を察知した。

「ザックス・・・ザックスが・・・」

ミーナはそんな予知夢をふと見ていた。

ミーナはトイレに行くふりをしてゲームを中断し外へ出て行った。
もちろんミーナはこの街の道の事もしない。ただ体が呼ばれる方へ向かっていった。

2時ぐらい。

少し遅れ気味の晩ご飯を取った。あんまり食べ過ぎてもと思い家から近くのハンバーガーのチーン店に入った。

「いや 今日は楽しかったな！」
と俺は呟つ。

「うん、私も。 ねえねえこの後どうする？」

まるでカップルのような会話をしていた。

あいつのことを見れたよ！」

「ちよい、トイレ行つてくれるわ。
と俺は呟つ。

「うん。」

俺はトイレへ行った。そして慣れない携帯にメールが来ている

ことに気付いた。

「あれ、メールってどうするんだっけ・・・」
と俺は考えながらメールを見る。

メールは裕太からだった。

内容は。

「データ中すまんよ。ミイナが消えたんだ。
つてほしい。」

とのメールだった。

俺はすぐミイナを探しに行こうとしていた。

・・・・・

そのころミイナは走り続けていた。

「（ザックスが危ない・・・）」

と思っていた。

するとミイナはある人にぶつかった。

ドーン

「いててて・・・

ミーナは言つ。

「ちょっと・・・大丈夫?」

とその人は話しかけてきた。その人は小鳥坂だつた。塾帰りで自転車に乗つていた。

「あの・・・」の近くのハンバーガー店を教えてーーそうしないと・・・ザツ・・・」・・・考樹が・・・」

小鳥坂はその名前にピンときた。

「わかつたわ・・・行きましょ。」

と小鳥坂は自転車の後ろにミーナを乗せてとりあえず近くのハンバーガー店まで向かつていた。

・・・

その頃ザックスはトイレから出て席に戻るうとしていた。

しかし、外の静けさに気付いた。あまりにも静かすぎていた。

そして一人の女の悲鳴・・・

「ま・・・真菜!?」

と俺は走つてトイレを出て上の階に行く。

「真菜ーー！」

と俺は叫ぶ

「ようやく現れたな・・・ザックス・アンドレス・・・」

と男が言つ。男は真菜を人質にしている。

「てめえ・・・そいつを離せ。」

といつ。

「それは出来ないね。離してほしいなら・・・お前の命を預けよう

か！？」

と男は言つ。

第4話（34話）目標（前書き）

この小説に出る登場人物の名前は実際の団体名・個人名とは一切関係ありません。

今回も小説を読んでいただきありがとうございます。もしよかつたら、評価・感想・お気に入りを宜しくお願ひします。

第4話（34話）田標

4話

イギリス・術者狩りの集まりにて

「なるほど……田標の物がここにはいなことはな……」

「どうやら逃げたみたいらしい。豈するにここを探すのは無駄といつことでは？」

「やつこいつ」とこなつますが……もつ見つかつたところの報告です。それに田標の物と考えられないものが一緒にいるといつことで私たちの奴らはもうその場所へ向かつてますよ。」

「その考えられないものとは……」

「わざお忘れのことかもしませんが……」

・・・・・

「何のつもつだ……こつてみるや……」
ヒザックスは言つ。

「決まつてゐるだろ。君の前に現れてこなことをすむつては……」
・わかつてゐるよね……

と男は言つ。

「てめえ・・・」

俺は思つていた。ここで攻撃をしてしまえば真菜にばれてしまう。
これは春田との約束だ・・・ばれては・・・

真菜は泣きそうな顔で助けを求めている。

「つか・・・ビリ・・・」と考へてゐるかしらねえが！――

俺は術を使わずに攻撃しに行つた。

「僕に勝てる? そんなことで?」

ザックスは殴り返れる。

「（鉄!?)」

と俺は思つた。

「（）いつは術師か・・・」

と俺は思つ

「まあまあ、術者だと思つて驚いているのかい? 術者狩りは術者も
いるんだよ。でも、僕はもっと強い力が欲しい。だから俺がお前
を・・・」

とザックスに思いつきり攻撃してくる。

その時だった。

相手の攻撃がザックスの目の前で止まった。

「あんた? 何してんの? 早く行きなさいよ!」

と小鳥坂は言う。小鳥坂はカードを持ってくる。それには「イナモリ」と書かれていた。

「お前……」

「説明は後にするわ。とりあえず真菜は眠らせておこた。 もう少し増分にできるんじゃない?」

と小鳥坂は言う。

「なるほど。術者狩りさん…… これでバトルが出来るってわけかあ……」

とザックスは皿を赤くなつたように呟く。

そしてザックスは闇術を使い攻撃する。

「なに!?」

ドーン

・・・

「ふう、どうにか氣絶程度にはしておいたが……」
とザックスは言つ。

「しかし、あいつは鉄術師だがなんでほかの客を眠らせることが出来たんだ?」
とザックスは聞く。

「最近は術師の中でも催眠液などが売られたりしているみたい……」

「

と小鳥坂は言つ。

「やうか……といひでなんでこいつにいるんだ?」

とザックスは聞く。

「あんた……それ最初に聞くんじゃない? この娘、私が塾帰りに会つたの。助けを求めていたから色々聞いてみるとあんたの事を聞いたから急いでこいつまで来たのよ。」

「やうか……まあありがとな……」

とザックスは言つ。

「別に……といひで聞きたいことがあるんだけど? この娘はあんたのなんなの……」

とストレートに小鳥坂は質問していく。

「いや……その……なんていうかな……妹といつか……」

とザックスは「まかす

「こんなに似てない妹がいるのかしら？あんたに違つてかわいらしいの！」

・・・

ザックスは現場を後にし家へ小鳥坂と向かつた。そしてイギリスの事からこじらる理由まですべてを小鳥坂に話した。

「なるほどね・・・ 要するに海藤は由紀の面倒を見てるわけね。」

「そうだ・・・ ところで・・・ お前はカードを使う術なのか？」

とザックスは聞く。

「そうよ。カードにはいろいろ種類があるんだけど一回使えば消えるの。私の体力ともリンクされてるから使いすぎると死んでしまう訳。人を眠らせたり攻撃をキャンセルしたりできるの。だからあんたより強いのかしら？あんたは攻撃を見ていると闇術師なのね。イギリスの闇術師ね～ ところで由紀は？」

「私は・・・ 水術師だよ・・・」

ヒリヤナは言つ。

「水ね・・・ 由紀はまだ小さいのに・・・」

と小鳥坂が言つた時、ザックスは少しうつをしていた。

そして小鳥坂はザックスの夕食を食べて夜8時、ひたすら帰つて行つた。

小鳥坂が帰った後、俺は真菜のことを少し考えていた。小鳥坂の母さんと真菜が友人だつたから真菜は疲れて寝てしまつたと言い家に送つていつた。

絶対に明後日今日の事を思つてゐるだううなーと思つた。

・・・

月曜日。

「おはよー海藤!! 昨日も爆発事故だつたよ。しかもこのあいだと同じ現象が起きてるらしいぜ。ほんと、困つたもんだな。」

と齊藤は言つ。

「さうかいさうかい。それは大変だつたな。」

と俺は適当に会話する。どうせ俺のことだと思つていた。

いつも通り下駄箱に行く。

靴を履きかえよつとしたとき真菜がやつてきた。

「お、おつ・・・ そつこえばいのあいだせ」めんな・・・

と俺は素直に話す。

「うんうん。私は大丈夫だつたよ。 それと・・・助けてくれてありがとう・・・何が起きたかわからないけど・・・きっとわからなの方がいいんだよね・・・」

と真菜は言つ。

「そりだな・・・そうしてくれたら助かるな。 それとお礼ならあいつにも言つておいてくれ。」

とザックスは下駄箱で待つてゐる小鳥坂を指さしながら言つ。

「うん。 わかつた。」

と真菜は言つと小鳥坂のところへ言つ。

小鳥坂は俺を横田でにらんでゐる。

俺は少しその目が怖かつたが・・・

・・・

俺はこの田先生に高一の勉強をしていないからこれから居残りをして帰ることになった。

だから小鳥坂と一緒に帰ることもなくなつた。

そして1時間ぐらい先生と居残りをして学校を出たときそこには裕太が待つていた。

「よー闇術師さんよー。」

と裕太は言つ。

「おこ、その呼び方やめろや。お前なんでここに来てんだ？」
と俺は聞く。

「まあよそなことどいつもいにいんだがな。ちょっとついてこい。」

と裕太に言われ俺は近くのコンビニについて今俺のマイブームのフルーツミックスを買いコンビニの前で裕太と話している。

「さてと、話があんだけど・・・これは極秘で入手した情報なんだ
が・・・聞いてほしいんだ。」

と裕太は言つ。

「なんだ？」
と俺は言つ。

「術者狩り達はどうやらイギリスに標的が居ないということを知つて標的を日本に変えたらしいんだ。その標的をみんな狙つてているみたいだな。それにお前は一昨日も術者狩りに会つてるはずだろ？もうここいらへんにいることは全てばれている。」

「おこおこ、待てって。お前、その標的が俺だというのか？」

と俺は言つ。

「まあそれもそういうしいが、どうやらまだあるらしいんだ。そいつらが言うには・・・今まで見たことのない力だつてな・・・なんか知つているか・・・」

「そんなんばかな……もう一人……待てよ……」

と俺は思つ。

「（ミ）イナはそんなんすごい力を見たことがない……だけどボスは俺とミイナを日本に送つた。それつて……」

「なんか知つてるか……」

「ミイナだ……ミイナに違いない……！」

と俺は言つ。

「そつか……ならば術者狩りが引くまで気を付けた方がいい。日本もそいつらを入国させないようにするらじしが日本にはもつすでにたくさんんの術者狩りがいる。」

「わかった。俺も注意をするわ。」

とザックスは言つと裕太は塾があるからと言い帰つて行つた。

俺はなんとなくミイナが心配で家へとダッシュで走つて行つた。

そして急いで部屋に入つて行つた。

「ミーナ……」

「ビ……どうしたのよ……

「よかつた……」
とザックスはほつとくる。

「どうしたの急に？ 気持ち悪い・・・」

ヒミツナは言ひ。

「気持ち悪い言ひなよ・・・ とこりでお前のあいだは俺のところに来れたとは予知能力が復活したのか？」

ヒザックスは言ひ。

「それが・・・ その時に見えたの。 でも後は・・・ 何も見えないの。」

ヒミツナは言ひ。

「そりか・・・ もし何か見えたら・・・ 言ひてくれよ・・・ それと・・・ これからいろいろとトラブルに巻き込まれるかもしれないんだ。 だけど俺はお前を守るからな。」

ヒザックスは言ひ。

「大丈夫だつて！ ザックスに守られなくとも自分で守れるんだからね！ 逆にザックスを守るんだから！」

ヒミツナは言ひ。

「そりか・・・ ジャあ飯作るか・・・」

ヒザックスは言ひ。

もつその頃には術者狩りが到着していたんだ。

・・・

・・・

飯を食べ終わった後、ならない携帯に一通のメールが届いた。

メールは教授の春田からだつた。

内容は明日1~2時に駅前のテニーステーションミーナなしで来てほしい、という事だつた。

俺はその約束を忘れないようにして眠りについた。

- end -

第5話（35話）オリジンパワー（前書き）

この小説に出る登場人物の名前は実際の団体名・個人名とは一切関係ありません。

今回も小説を読んでいただきありがとうございます。もしよかつたら、評価・感想・お気に入りを宜しくお願ひします。

第5話（35話）オリジンパワー

12時に約束の場所。

ミイナは家で留守番ということにしておいた。

10分少し早くその場所へ行つた。俺はだいたいどんな話をされるかわかつていた。

きつとあることだ。

「いらっしゃいませー 1名様でしょつか?」

と店員に聞かれる。

「いや、もう先に友人が待つているんで・・・」
と俺は言つ

「あ、それならあちらのテーブルになります。」

と言われ案内される。

「あつ 海藤君ーー」
「あつ ちーつちーー」

と大学教授の春田が呼ぶ

春田は大学でこの人体実験の事について調べていた。春田は昔イギリスの大学で人体実験の手伝いをしていたんだ。しかし、人体実験があまりにも危険すぎることを知つて反対側に向かうと実験チーム

からは追い出され今ではこの実験をどうすれば止めるかを研究している。

「どうも、久しぶりとこうといふか……」
と俺は言つ。

「そうね……まあもう少し慣れたころに呼びたかったのだけど……」

と春田は言つ。

「だいたい言いたい」とはわかっている。術者狩りのことか。」

と俺は言つ。

「まあね。きっと裕太たちから聞いたのでしょうか。」

「あいつらのこと知つてるのか？」

「まあね。実験の時は関つていないけどあの子たちには助けられたから。」

「ええそうよ。あれは5年前ぐらいの話。私はイギリスで研究をしてたけど日本へ返されたのは知つてるよね？もうその頃は日本に術者狩りというのが居たのよ。私は研究グループでも結構トップな所にも言つたからだいたいのあなた達の術の構造は知つているんだわ。それを知つた術者狩りは一気に私のところへ近寄つてきたの。

その時に命を失いそうになつて……だけどそれを助けてくれ

たのはあの子たち。命の恩人だわ。」

と春田は説明する。

「自分で作った道具に助けられたわけな。」

と俺は言ひ。

「ちょっとー 私は研究だけを少しだけ助けただけよ?」

「まあ分かってる。お前の判断は間違つていないうつてこいつとはな。
もちろん騙されていたつてことも」

「あらがとう。理解してくれて。それより話なんだけど・・・

術者狩りの事」

と春田は小声で話す。

「今とこの狙つているのは・・・あなた・・・じゃなくて・・・
・由紀やさんの事。」

と春田は話す。

「由紀やさんの事か・・・つておーいーなぜだ?」

と俺は大声でいう。

「ちょっと声がでかいー 何か由紀やさんのことについて知つてい
る」とある?」

「・・・あいつの術につけては良くわからないな・・・

「やうなのね……どうやらあの娘、すんごい力を持つてこるらしいわ。術者狩りが狙つぐらー。」

「それなら……お前が情報を持っているんじやネエのか?」

「持つてたら今頃動いてるわよ……そこが謎なの。私の推測だけ……あの娘はもともと術を持っていたのではないのかと?」

「そんなのあり得るわけないだろ……お前、イギリスのデータベースも調べたのか?」

「ええ、もうやつたわよ。だけど実験リストには載っていないわ。むしろあの娘の年だと……もう実験はちょうど終わっているわ。」

「つそだろ……そんなわけ」

「もしあり得るとしたら……由紀ひやんは術の起源『オリジンパワー』の持ち主なのかもしない。」

その力があれば……この世界なんて破壊は簡単よ……

「ここに調べるにはできないのか?もし、あいつの身になにかあれば……早くそれが違うことが証明できれば……」

と俺は言つ。

「それも考えたけど……今はとても危険だわ。もし検査中に機械でも乗つ取られれば術だつて引き出すことが出来る。そしてその人の術にでもなつてしまふわ……」

「術者狩りは今どうなつてているんだ?」

「多分必死にあなた達を探しているわ・・・ 一刻でも早く見つけて・・・ 殺し・・・」

と春田は下を向きながら言ひ。

「わかった。ありがとう・・・ また何か分かつたら連絡してくれ・・・」

「あなたも氣を付けてね。 本当に元。」

といふ俺は店を出る。

「（）イナが『オリジンパワー』を持っているだと・・・ オリジンパワーはもうこの世の中にはないと聞いていたが・・・」

と俺は思いながら走つて家へ向かつた。

家まで500mといふと嫌な予感がした。

「ミーナー？」

俺は急いで家へと向かつた。

・・・

家に着いた。家からは煙が出ていた。

扉が完全に壊されていて他のアパートの住民は外へ避難していた。

俺は住民の人すぐに聞いた。

「すみません！ いつたい何が。」

「俺もよくわかんないが……ひょうひじ家に着いたときドーンつて音がして……外を見たらこの通りだよ。」

「警察とかは？」

「もうすぐ来るひじいけど……ビリやら人質みたいでな……」

俺はすぐに部屋へと向かった。

「（//イナが・・・//イナが・・・）」

なかは煙で見えなかつた。

もひと部屋の奥に向かうと女と//イナが居た。

「おこーてめえ・・・//イナから離れろー！」

と俺は叫ぶ。

「あらあら・・・ザックス・アンドレスね・・・待っていたわ。」

と女は言つ。

「お前の狙つてこるもののはわかっている・・・黙つて離せよ・・・」

「それは出来ないわ。あなたはわからないかもしけないけどもし私

を殺せても次を待つている人はそこらへんにたくさんいるわ・・・。
だからおとなしく私に殺されるのを推薦するわ。」

「つち・・・みんな」」おで来て いのつて訳なんだな・・・」

と俺は言うと

「逃げ道がねえのなら・・・ストーレートにいくぞ・・・」

といい俺は攻撃をしていく。

「ダークボーラー！」

「少しだけ相手をしてあげましょうか・・・消えろお！」

「私の剣を壊せることができないかしら・・・」

と相手の女は攻撃を剣で止める。

一何？劍術師か

俺は手から出血していた。

「サッケス！！」

四三

「おやおや早速私の攻撃が効いたかしら・・・ 着いてこれるかしら・・・」

と女はいよいよも速いスピードで剣を振つてくれる。

「何・・・見えない・・・」

ヒザックスはビリビリか避けていく。

その時だつた田の前に何かのカーデが地面に落ちた。

「（なんだ？）」
と俺は思つ。

「考樹ーこれを使つてーー」

と小鳥坂は言つ。

カーデからは剣が出てきた。ビリヤリ道具カーデだ。

「わかつたーありがとなー！」

と俺は言つと小鳥坂はミーハーのところと走つて行つた。

「私の獲物に手を出すんじゃないー！」

と女は言つ。

「お前の相手は俺だつていつてんだろがーー 他の奴に手を付ける暇でもあるのか？」

と俺はいい剣で攻撃をとめる。

「（なによ・・・）の剣・・・見たことないわ・・・ まさか術が剣を取り巻いてくるとでも・・・）」

と相手の女は言ひ。

「どうやら本気の様ね。私はアンナよ。名前を言つたからにはあんたを殺すわ・・・」
とアンナは言ひ。

・
・
・

その頃小鳥坂はミイナのロープをほどき1・5?ぐらに走つて人目
のない少し暗いところに逃げていた。

「もう大丈夫だよ・・・」
と小鳥坂は声を掛けた。

「あつがとう・・・姉ちゃん・・・あのそ・・・」めんね。

とミイナは言ひ。

「謝る必要なんてないわよ。あこつまやつてくれるわよ。」

「やうじやないの。」
とミイナは言ひ。

「ザックスが追われているのは私のせいなのよ・・・私があんな
力さえ持つていなければ・・・奴らの目的はほとんどが私なの・・・

・ 私が着いて来たりしたから・・・

「そんなことないわ。その考・・・いやザックスはあなたを絶対守
るわよ。あなたが悲しむ必要なんてないわ・・・」

と小鳥坂は言ひ。

「よおお嬢ちやんとオリジンパワーよ・・・
と若い茶髪の男が声を掛けてくる。

「あんたは誰よ・・・
と小鳥坂は言ひ。

「ははは、術者狩りだよ。オリジンパワーを狙つている・・・
と男は言ひ。

「由紀、動かないでよ。」

と小鳥坂は言ひとカードを出すが・・・

「（しまつた、今カードは使えないんだ・・・考樹が使つている・
・）」

「どうしたんだい！？まさかカード術師さんかい？」

と男は言ひ。

「（でも由紀を守らなきや・・・）」

と小鳥坂は思ひと素手で攻撃をする。

「つおおおおおおお」

しかし小鳥坂の攻撃は素手で止められて弾き飛ばされる・・・

「やつやめて・・・」

ヒリヤナは心の中で呟く。

「さつ・・・・・ もうこわいおおおお」

と小鳥坂は向かうが

「おじおじ、そんな攻撃でいいのかい？俺の力にはかてねえぜ？」

おりみつ

と男は小鳥坂を蹴り飛ばす・・・

「うう・・・ まだまだこんななんじやないわよ・・・

と小鳥坂はもう一度攻撃をする

「だから・・・ 今度はほんとに死ぬぞおー！」

と男は叫びつと

「（死ぬーー？）」

ヒリヤナは思ひ。

「（みんな私のために・・・ 私のために・・・ もう私も・・・）」

ヒリヤナは思うと

「水の神よ・・・ 私たちに逆らつ物を全てこの世から消しあの2人を救い出よ。」

ヒリヤナはこつもと違ひ声で言ひ。

「じつじたのよ・・・

と小鳥坂は言ひ。

「ぐうおおおおおおおおおお」

ヒーナは言つてヒーナの手から大きな水の玉がいくつも出でていた。

「ウォーターカッター……水の神よ 奴を全て粉々に刻めよ

ヒーナは言つと大きな水の玉は空を飛び相手の男の頭の上から早
いスピードで落ちて行つた。

「なに!?

そして男は見ぬけに水によつて粉々になつていつた。

するヒーナは倒れた。

「由紀!!

と大声で小鳥坂は言つ

・
・
・
・

その時ザックスはアンナと戦つてゐた。

「どちらもぼろ雑巾みたいだなあ……
と俺は言つ。

「最後は……綺麗に決めましょつか……覚悟するがいいわ……

」
ヒアンナは言つ。

「つふん……いいだろ……俺はいつも命懸けだからな……

とこうと2人は剣を構えていた

その時向いの側から何かが降つてくるのが見えた

「なんだあれは・・・」

と思つてこらとアンナはすでに「ひざをはじめに」と思つてこらとアンナはすでに「ひざをはじめに」

「まよい・・・」

キーン

・・・

「うう・・・うわあああああああ

とアンナは顔を上げていた。

何が起きたんだとその時は思つていた。

水は光のように震つててきた。

「なんだ・・・これは・・・」
とザックスは思つ。

すると向いの側からミイナを背負つた小鳥坂が走つて來た。

「考樹〜!!!」

と小鳥坂はやつてきた。

・・・・・

俺の家。

「全く・・・一人で暴れまわるんだから・・・」

と小鳥坂は手当てしながら言つ。

「いって・・・もつと優しく扱つてくれよ。」

「うるさいわね！・・・といひで・・・あんたの相手も水の玉みたいで死んだの？」

「ああ・・・確かにあればそつだ・・・」

「それなんだけど・・・どうやら・・・由紀ちゃんが出したみたいで・・・」

「由紀が!?」

「うん、確かあの男がオリジンパワーって言つてたわ・・・」

「やはり本当なのか・・・」

「何か知つてるの?」

「知つてるも何も奴らの狙いはこいつなんだ。ここの力を狙つている

んだ。」「

と2人は話す。

辺りは陽が暮れて行つた。

あれから俺は廊下で寝て小鳥坂とミイナはリビングで寝ていた。

朝目が覚める・・・

「（うう・・・なんでここで寝ているんだ・・・そつか・・・あいつが来てるんだ・・・）」「

と俺は思つと向ひから走つてくる音がする。

「考樹〜！！

と俺を踏みながら走つていく。

「おえ〜〜お前踏むなよ〜〜！」

「それよつ〜〜由紀ちゃんが〜〜！」

・・・・・

どうやら由紀は外へと出て行つたみたいだ。

俺たちは裕太たちにも協力をしてもらひ探すこととした。

もう2時間も探していた。

さすがに心配だつた。

「後探していなるのは・・・あの公園か・・・」

と俺は公園へ向かつた。

するとミヤカはアランに向かっていた。

二十一

と俺は叫ぶ。

— サッケス・・・

と小声で呟く。

「なかつた……」
「何でくれで」と俺は叫ぶ。

「おひや、色々と悲しいったらソリに着いたらいい。」

「さあ家に帰ろ。小鳥坂も来てるぞ。」

と俺は言つ。

「ねえザックス……ごめんね……」

と泣きそつた顔でいう。

「どうしてだよ・・・」

「私さえ一緒に居なければ・・・ザックスはこっちでもっと楽しく生活できたんだよ・・・だけど・・・私のせいでも・・・もう、私はここに居ちゃいけないんじゃないかなって・・・だから私を先にイギリスへと・・・」

「それはできねえな。」

と俺は叫び。

「俺は一つ約束をしていてな。俺はお前と約束をした。お前を何からも守るとな。どんな力を持っているか知らんが・・・俺はお前を誰にも傷つけたりさせねえ。もちろん俺だけじゃないんだ。小鳥坂も裕太も綾乃たちもそうだ。だからお前は何も思う必要はない。勝手に死ぬんじゃねえぞてめえ。」

と俺は叫びミイナは笑顔になつていた。

「うん!」

公園の外では小鳥坂達が聞いてた。

・
・
・

キーンゴーンカーンゴーン

「海藤ーおはよっすー!ー 昨日も事件があつたとはなんどこの街は荒れてきたなー」

と斎藤がいつも通りに話す。

「みんな思春期だからそんな事件が起きてんだよ。うつと我慢してやんな。」

と俺は囁く。

「いみわからねーよ

と斎藤は言いながら下駄箱へと行く。

そこには小鳥坂が待っていた。

「よー・・・・考樹・・・」

と小鳥坂は小声で恥ずかしそうに囁く。

「（名前で呼び合つだとーー）

と斎藤は思つ。

「なんでしょうか小鳥坂さん。」

「人が名前で呼んでやつてるのとか字で返すのはないでしょーーー」

「名前覚えるのめんどくせーよ。」

「あんたいい加減にしなさこよーーー。それよりーーー昨日は見つかってよかつたねーーー。」

「えー。ありがとな。」

「あんた、本当に田舎者やんを守りつゝ囁くの?」

「はー? もううんだよ。俺はもう向もなくしたくねえからな。」

「ふ～ん」の変態ロココノンがー。」

と少々で囁つ

「ロココノンやせんねー。」

とこつも廻つの余韻をこじこた。

・ お こ

第5話（35話）オリジンパワー（後書き）

最後まで読んでいただきありがとうございましたよかったです。評価・感想・お気に入りを宜しくお願いします。

第6話（36話）ハストロール（前書き）

ネットの調子が悪かつたため更新が遅くなりました。
この小説に出る登場人物の名前は実際の団体名・個人名とは一切
関係ありません。

今回も小説を読んでいただきありがとうございます。もしよかつた
ら、評価・感想・お気に入りを宜しくお願ひします。

第6話（36話）コントロール

36話から

俺はミイナが特殊能力を持つていることを知つてから考えていた。

後から聞いた話だがミイナは水の能力だけではなくほかの能力も持つてゐるらしい。

すべての起源だと春田は言つた。まだミイナは水の能力しか發揮をしていないらしい。

ミイナがこの間みたいに能力が体を動かせば誰も勝てなくなるそうだ。

これも春田から聞いた話だがこの力が見つかった理由は昔話にある。とても貧乏だつた村は家をたくさん建てるために多額のお金を隣町から借りたんだ。

その村はみんなで農業や商業を頑張り借金を返すことになった。

しかし、隣町の借金取りはそのお金を素直に受け取らなかつた。

そいつらはお金が足りないと村人たちを騙す。

そいつらはお金で返せねえのなら命で返してもうおつかと言ひ村人たちを殺そうとした。

その時少し厚めのコートを着た旅人が村人の前に現れた。

その男は空を一気に暗くしある力で借金取りを消してしまつ。

そんな話は誰も信じなかつた。しかし、その話を信じて能力を探し続けた男がいる。

そいつはなんとその能力をとある人から見つけ出した。

そしてその能力をイギリスのために能力を抜き出し「ロッピーを作り俺たちの体に組み込まれていてるわけ。

「ねえザックス、もうお皿だよ。」

と考え事をして「俺に話しかける」ミーナ。

「もうこんな時間か・・・何も用意していなかつから外で食つか」と俺はいい日曜の昼は外で食べることを決めた。

土曜は補修が入つて「俺には留守番してもらつてたもんでたまにはいいだろ」。

しかし、術者狩りはミーナを殺してどうやつて力を抜くのだろう。ミーナが死んだら能力も死ぬんじゃねえのか。そして、俺を狙つていた理由は何なんだ。俺はもちろんオリジンパワーなんてもつてない。

意味があるのか・・・

「これほしーーー！」

と某ハンバーガー店で注文が回つてきた。俺はまた考え事をしてい

た。

ボスは知っていたんだ。ミイナがどんな力を持つていてどれだけ狙われているかを・・・

「あの・・・ザックスさん?」「

と後ろから声を掛けられる。

ついイギリスで呼ばれていた名前だから後ろを振り向く。

「お久しぶりです。あの・・・綾乃って言つたら・・・」
と綾乃是言つ。

「ああ・・・あん時の・・・昼飯かい?」

と俺は尋ねる。

「ええ、なんか勉強はかどらなくて・・・」

と綾乃是言つ。

・・・・・

俺たちはいろいろと話を聞くために一緒に昼飯を食つ」とこした。

「学校はどうですか?」「

と聞かれる。

「ああ、あんなに大勢だったのには驚いたよ・・・
と俺は言つ。

「ミーナは?
と聞く。

「うん。向こうとは全然違つたね。
と答える。

「なるほど〜 あ、そういうえば私自身紹介していなかつたですね・・・
・ 私は神谷 紗乃です。術は超音波を使います。」

「電波とは違つのか?
と俺は聞く。

「微妙に違つんです。電波の方が威力は強いのですが超音波はスピードが速いのです。」

「やうなんだ・・・難しいな・・・」

「超音波か・・・
とミーナは静かにつぶやく。

「どうしたんだ?
と俺は聞く。

「あ・・・なんでもないよ・・・
とミーナは言つ。

「それじゃあ私行きますね・・・宿題があるので・・・」

と綾乃は言つと俺の頭に何かのメッセージが送られてきた。

「（夜7時に）・・・あなただけで。）」

「よろしくです～」

と綾乃は言つと店を後にした。

「ミイナ、食料買って帰るか。」

と俺たちも店を後にする。

・・・

夜7時 セツキの店。

「よかつた～あなたに通じて。」

と綾乃は言つ。

「ああ、どうにか通じたぞ。」

と俺は言つ。

「話があるのですが・・・あなた達はいろんな人から狙われているのは知ってるでしょう。」

「ああそつだな。」

「狙われているのはあなた達だけではありません。私たちもです。」

と驚きな発言を聞く。

「要するに・・・・・術者狩りは術を持っている人ならだれでもいいのか？」

と俺は聞く。

「それはもう昔の考えだそうです。どうやら術者狩りの間で何らかのゲームが開催されてるみたいでその内容が・・・」

と俺は耳を傾ける。

「・・・・・術者を全て殺す。」

と綾乃是小声で言つ。

「そうすれば永遠の術が手に入れれるといつらしいです。」
と綾乃是言つ。

「そんなんばかな・・・・・ だれがそんなの作ったんだよお？」

「私が思うには術者狩りをまとめていてこの力を開発した人だと思います。」

と綾乃是言つ。

「なんで開発した人なんだ？」

「どうやらその術者狩り達・・・・・ 命と仮の術を交換しているんです。私たちは命と術を両方持つてるので術がなくなつても生きることが出来る・・・しかし、その術者狩り達は片方しか持つていないので術がなくなれば死亡・・・・ ですから死ぬ氣でかかつてくるでしょう・・・・・ そんなことができるるのは開発者しかいないので

はと・・・

「そんなゲームはおかしい！ いくらなんでも・・・ その開発者を殺しに行つた方が早いんじゃネホのか？」

「わかつていればそんなことはもうしていません！」

と綾乃は言つ。

「どうあえず今でも狙われているということは知つていてください。

」

と綾乃は言つと

「それじゃあまたどこかで会こましょいね。」

といい店を後にする。

「周りに狙われているか・・・

とおもいながら帰宅する。

そして次の日のあせ・・・

「海藤よーーおはよーー！ 今日は修学旅行の班決めだつてよお

と斎藤は言つてくる。

「修学旅行？ 旅行でもスンのか？」

と俺は聞く。

「そんなイベントがあつたのかあ・・・」
と俺は思う。

A 2x3 grid of six black dots, arranged in two rows and three columns.

席に着くといつも通りの光景だった。小鳥坂が机に座つてまだ出来ていかない宿題をしている。

斎藤は俺の隣でなんか喋っているがどうでもいい内容だもんで適当に聞き流している。

そして6時間目の総合の授業。

修学旅行の班決めだつた。そもそも修学旅行の意味を知らなかつたがどうやら北海道へ行くらしい。

「おこ、齊藤。北海道つて一番北のところだよな。」

「やうだぜ。夏だからちよつといつも氣候りしこぜ。」
と齊藤は言つ。

「めんどくせえな」

「まあまあ、高校生活の最後のイベントなんだからよーーー。」
と斎藤はいい俺たちは下校準備へと入った。

その日はいつもみたいに小鳥坂は待っていなかつたので一人で家に変えることにした。

「ただいまー」
といつも通りに家に向かつて言つ。

「ねえねえ、今日も、友達の家にいっていい?
とミイナは聞く。

「そういえばミイナが人の家に遊びに行くなんて聞いたことなかつた
なと思った。

「あいいんじゃね?」

と俺は言つ。

「ヤッターーーー! じゃあ準備してくるねーー!」

とミイナはいった。一応、人の家だから俺も家の前までは連れて行
こつと思つてゐる。

・・・

俺はミイナを友達の家まで連れて行き家に帰るのがめんどくせーな
ーと思いながら散歩をしていた。

「今日の晩飯の材料でも買いに行くか」と思いながらスーパーへ
立ち寄る。

いつも通りに材料などを買つていてビニール袋で見慣れた顔の人人が居た。

「誰だろ?と思いつながら見ていてその人と目があつた。

「あなたは・・・」

と声を掛けられる。

「あん時の・・・ 裕太たちの・・・」

「あんまり馴れ馴れしく話しかけるのやめてくれませんか・・・
急いでるんで・・・」

と相手は言つ。

「おーおー、どうこいつことだよ? 確か透哉だつけ・・・」

「名前を呼ぶのはやめて下さいー そして僕の名前をすぐ忘れて
下さい。」

とこつとすゞに行つてしまつた。

「なんだよ・・・ あいつ・・・

と俺は思いながら買い物を再開する。

すると魚売り場の前にいつも通りに小鳥坂が居た。

「(またあいつか・・・ こつこつ居るな・・・) 「

と俺は思いながら

「おい、小鳥坂。」

と声を掛けると。

「うわあ・・・なんだ・・・あんたね・・・」

と小鳥坂は言つ。

「なんだよって失礼だな・・・」

と俺は言つ。

「つむきいわね・・・やうだあんたに聞いてもらいたい話があるんだわ・・・」

と小鳥坂は思い出すよつて言つ。

「術者狩りにつづてはもう知つているわよね・・・びりやりその術者狩り・・・ここ数日間でとても勢力を付けているわ。あんたもいつ命がなくなつてもおかしくないわ・・・」

と小鳥坂は言つ。

「そつか・・・意外と早かつたんだな。」

と俺は言つ。

「あんた・・・冷静ね・・・」

と小鳥坂は言つ。

俺はレジに向かいながら

「俺が犠牲になるだけであとが普通になるんならそれはそれでいいんだ。ま、そんなことにはなりたくないがな・・・また明日な。」

「

と言いながら俺は店を出る。

「バカはあんなことしか考えれないのかしら・・・」

と小鳥坂は思う。

・・・

そのころ透哉は店の帰り道を歩いていた。

すると偶然、透哉は少し大きい公園を通りかかった。

透哉は何か公園から嫌な予感がすると感じて公園の奥へと入つていった。

そして透哉は公園で倒れている人を見つけた。

「（いれは・・・）」

透哉は奥へ入つていく。

すると突然悲鳴が聞こえた。

「キヤー——」

透哉は急いでこぐ。

「（えつなかこるんだ……）」

そして一番奥へと行った。

ナリバナナとそのナリバナの友達が倒れていた。

透哉は急いで隠れた。

「（あれば……あいつの……）」

と透哉は思つ。

「お願いだから……私の友達まで被害を出さないで……

ヒリナナは言つてこな。

「ならば……交換条件つてこいつのまじだ……お前の命は残してやる……その”術”をこだだこひじやねえか……」

と男はヒリナナに向つた。

「（”術”……もしかして……術者狩りの仕業か……）」

と透哉は思つ。

「セヒト……どうだい？お嬢ちゃん。お嬢ちゃんよおいつよつ……
・オリジンパワー……」

と術者狩りの男は言ひ。

「・・・」

ミーナは黙り込んでいた。

すると

「わかつ・・・」

ヒマナは言いかけた時、透哉は決意を決めた。

「おこーお前・・・ そいつを離さないか・・・」

と透哉は言ひ。

「おやおや、オリジンパワーを守る人かい・・・ ふーん ザック
ス・アンドレスじゃなさそだな・・・」
と術者狩りの男は言ひ。

「（ザックス・アンドレス・・・ やはりあいつも狙われているの
か・・・）」

と透哉は思ひ。

「理由はわかっている。でもそいつを離せ。簡単には渡さない。
と透哉は言ひ。

「やうかい・・・ ならば俺に勝てるかな? ?」

と術者狩りの男はとても速いスピードで透哉を殴る。

「ぐはっ・・・」

と透哉は倒れこむ。

「おやおや、術者じゃないんかい？ 術者じゃネエ奴は俺に勝てるのか・・・」

「（つち・・・つまく術をコントロールできない・・・）」

と透哉思ひ。

「いけえー ストーンハンドー！」

と透哉は行くがうまく術が成功しない・・・

「おいおい・・・ その力で術を使つたとでも云つのか？ 全然いたくねえーぞ。」

と術者狩りの男は叫び

「もう一度言つが・・・ 術者じゃねえやつは俺に勝てねエンドよー！」

と術者狩りの男は吹き飛ばす。

「ぐはあつっ！」

ぐはあつとも強いパワーで口から血を吐く。

「セヒト……終わりにしようか……」

と術者狩りの男は透哉のところへ行く。

「俺のスピードと力でお前の首を絞める……これで終わりだ……」

・

と透哉は首を絞められる……

「（もう終わりだ……）」

それを見てミーナは

「（私のために……私のためにして貰ってるんだわ……私も動かなきや……）」

ヒーナが動いたとしたとき。

「ぐはっ……」

と術者狩りの男は透哉の首を離した。

「なんもしてねエ奴を勝手に殺すんじゃねえぞ。 てめえ脳みそあんのか？」

とセヒに居たのはセヒの……

第7話（37話） 透哉 ストーンマジシャン（前書き）

この小説に出る登場人物の名前は実際の団体名・個人名とは一切関係ありません。

今回も小説を読んでいただきありがとうございます。もしよかつたら、評価・感想・お気に入りを宜しくお願ひします。

第7話（37話） 透哉 ストーンマジシャン

37話。

「まだ有理姉ちゃんが生きているときだった。僕はあまり術をコントロールできなくてずっと困っていた。」

「裕太たちの仲間にはいるもののコントロールができなかつたから術者狩りが来ても助けられていばかりだつた。そんな僕をいつも励ましてくれたのは……」

「また練習しているの？」

と話しかけてくる有理

「あ……うん……少しでもコントロールしたいからね……」

と僕は答える。

「ふう～ん でも、私は今の透哉でいいと思つけどな……」

と有理は言つ。

「でも……そんな感じみんなの迷惑になるよ……」

と僕は言つ。

「そうかなあ？私は一生懸命練習をしている透哉が好きだけじゃないと有理は言つ。

僕は少し照れていた。

そんな有理姉ちゃんが僕は好きだつた。

でも僕たちとの別れと本当の別れがあつてから僕は何も考えれなかつた。

「（姉ちゃんが・・・姉ちゃんが・・・）」
と僕は言つ。

「透哉・・・もう立ち直りつよ・・姉ちゃんのためにも・・・
と当時の綾乃は声を掛ける。

しかし、僕はそんななんじや立ち直れなかつた。

そんな姉ちゃんを殺した奴が・・・姉ちゃんを殺した奴が・・・

僕は許さない・・・

（）

「なんもしてねエ奴を勝手に殺すんじやねえぞ。 てめえ脳みそあ
んのか？」
と僕は言つ。
ザックス

「よお、現れたかザックス・アンドレスよ・・・ 待つてただお。
と術者狩りの男は言つ。

「そりやひ、そいつらを離してもひおひつか・・・お前の命のために
もちようどこいぞ・・・

と僕は言つ。

「ほう・・・俺も永遠の力が欲しいんだよ・・・ そんな夢を」

「あきらめるわけにはいかないんだよな・・・」
と術者狩りの男は言つ。

「な、ひ、ま、・、・、強、で、も、返、し、て、も、り、ま、う、か、・、・、」

と俺が攻撃をしようとしたとき

「やめてくれ！！」

と透哉は叫ぶ。

「どうしたんだ!?」

と仰は戸を掛けた

「小さい女の子ぐらい・・・僕だつて守れます・・・僕だつてできるんだよ!!!! だから・・・引っ込んでもらえますか・・・これは僕たちの戦いなんです!!」

と透哉は言へ。

俺は攻撃を止めた。

すると透哉は攻撃をしにいった

しかし透哉の手からは術がない。

その間に俺はナマのところへと向かつた。

「大丈夫か！？」
と俺はミイナに囁く。

「うん・・・大丈夫・・・」

とミイナは囁く。

「ミイナ、聞いてくれ・・・」
このことは・・・お前が全て悪いと
思つてほしくないんだ・・・だから・・・何も考えるな・・・俺
が守るからな・・・」

と言いながら俺はミイナを安全な所へ連れて行く。

「う・・・うん。」

とミイナはうなずく。

「はあはあ・・・もう一度・・・ストーンハンド！・・・」
と攻撃をするがはずれる。1回しか攻撃が出来ていない。

「ぐはあ・・・」

と透哉は倒れる。

「まだまだ・・・」

と透哉が思つた時遠くから声が聞こえた。

「おい、てめえ・・・聞きたくないなら聞かなくていい・・・た
だ俺からのヒントだ・・・」
と俺は話す。

「なんですか……急に。」
と透哉は言つ。

「お前が出来ない理由……それは術に一つの事を集中していねえからだ。お前は何かのトラウマを抱えているかもしないが……今はそんなことを忘れて術だけに集中しろ……お前に足りないのはそれだ。」

と俺は言つ。

「（そんなの……わかってるよ……。僕だつて術を発動するのが怖いんだよ。死ぬかもしれないし……また外れるかもしれない……。それになんでここに姉ちゃんを殺した奴がいるの……。おかしいでしょ……。僕は殺したい。そいつを姉ちゃんの敵だと思つて……。僕は……。僕は……。）」

「お前を殺すんだよおおおおおお……！」

と透哉は術者狩りの男に攻撃をしていった。それは術が発動されていた。

「やつたぞ！……」
と俺は言つ。

すると術者狩りの男は倒れて行つた。

そして透哉も倒れてしまった。

「おい！……大丈夫か！……透哉！……」
と俺は叫ぶ

・・・

透哉とミイナとその友達は病院に搬送され手当をしていた。

術者狩りの男はイギリスからの入国を禁止されていたのに偽造バスポートなどを使ってうまく入ってきたそうだ。しかし、警察に保護されイギリスへ返されたらしい。

事件現場は何事もなかつたようになっていた。

俺は病院の待合室で裕太たちと待ち合わせをしていた。

「ザックス！ 透哉は・・・

と裕太は声を掛ける。

「ああ大丈夫だ・・・少し疲れているみたい・・・

と俺は言つ。

「そつかあ・・・今回も世話になつたみたいだな・・・

と裕太は言つ。

「お互い様だ・・・それより早く行つてやれ・・・

と俺は言つ。

・・・

・・・

「（ハハ）は・・・」

と透哉は田を覚める。

「（確かに俺は戦っていたんだ、最後はあのザックスに言われたとおりにやつて確かに術者狩りを倒したんだった・・・それから記憶がないが・・・）」

と透哉は考えていた。

するとドアが開く音がした。

「透哉！！」

と裕太たちが入ってくる。

「透哉！大丈夫か・・・」
とみんなが言つ。

「うん・・・大丈夫だよ・・・」
と透哉は言つ。

「お前・・・術が成功したらしいな。しかも今まででもむかじいのを・・・」

と裕太は言つ。

「うん・・・そうみたいだね・・・」

と透哉は言つ。

「ねえ、裕太・・・あのザックスっていう人も・・・悪い人じやないみたいだね・・・」

と透哉は言つ。

「さうだな・・・姉ちゃんの気持ちがなんとなくわかるな・・・」

と裕太は言った

・
・
・
・
・

「（）は・・・病院か・・・）」

とミライナは田を覚ます。

もうその時は夜だった。

椅子の上でザックスが座りながら寝ていた。

「ザックス・・・ザックス・・・」

とミライナは声を掛ける。

「ん・・・あ・・・ミイナか・・・目が覚めたのか・・・
ていうか・・・もう・・・おれ幸せなんですけど・・・これで・・・
・・・帰りたいんですけど・・・あと30分・・・時間が・・・」

と寝ぼけているザックスにミライナはびんたをする。

バチン

「いってええええ なにすんだよ・・・」

「俺は言ひ。

「変な夢を見ていたみたいだからね・・・」

「ハヤナは言ひ。

「夢・・・・・あつ・・・・・誤解だよ・・・誤解・・・気にスンナつて・・・」

「俺は言ひ。

「まあ・・・・無事でよかつたよ・・・

と俺は言ひ。

「それよりザックスの頭を治療した方がいいかも知れないね。」

「ハヤナは言ひ。

「」勘弁を・・・

「う、俺は」の田元春田と話したんだ。

「海藤君、いろいろと大変だつたみたいだね。」

「ああ・・・・・いろいろと・・・・とじりで話とは?」

「わうね・・・・」うちも現場を調べてみたんだけどありえないことがおきてこることでついて話したいんだ。」

「なんですか・・・」

「今回の事件で術者狩りの犯人の怪我から焦げているのが見つかったの……」

「焦げ……？」

「そう、あなたは闇。焦がすことはない。透哉君は石。焦がすことはない。すると……焦がせると言えば……」

「待つてください……まさかミイナとか……」

「その可能性が十分にあるんだわ……由紀ちゃんが直接被害にあつていなに倒れているのはおかしい。それにその電気が由紀ちゃんの方向から出ている」ともわかつたわ……」

と春田は言つ。

「それじゃあ……ミイナは本当にオリジンパワーを持つていても……」

「それはほぼ確定だわ……これ以上由紀ちゃんにいろんな種類の術を使わせると……あなたでもかなわないほどのテイクオーバーをするわね……」

「そんな……」

「それに使いすぎると……死も確定だわ……」

と春田から言われた。

「死！？ なぜだ……オリジンパワーなら……」

「そんなのは関係ないわ・・・」

と春田は呟つ。

・・・・

次の日、ミーナは退院できることがわかった。俺たちは帰るといひしだ。

「あの・・・ ザックス・・・」

ヒマーナは顔を掛けた。

「なんだ?」
と俺は呟つ。

「私・・・その・・・」

「いいんだ・・・何も思ひ出さなくとも・・・ お前が何も思ひ出
す必要はないんだ・・・ 言つただろ? 何があつても俺はお前を守
るし助けるからな・・・」

と俺は呟つ。

すると前から透哉が歩いてきた。

「あの・・・ザックスさん・・・」

と透哉は話しかけてくる

「どうした？」

「その……」のあいだはありがとうござります。そして「ごめんなさい……」僕は勘違いしていました。姉ちゃんの死があなたのせいだけだつていうことを……僕もあなたからいろいろと教わりましたよ……これでまた術が使えそうな気がして……僕は大事なことをずっと忘れていました……思つてはいるだけじゃなくて先に進むこともしないといけないつていうことを……まだ僕は姉ちゃんの死を受け入れていませんが僕がずっと姉ちゃんのことを見つっているより先に進んだ方が姉ちゃんは喜ぶんじゃないかなって……」

「その考え方、あいつにそつくりだな……」
と俺は言つ。

「ま、お前もいろいろと悩みがあつたみたいらしいしな。でも、俺のことを恨み続けるのは間違つていない。俺が守れなかつたのは事実だ。でもその事を思つてはいるより先に進んでいった方があいつは喜ぶかもしれないな。お互いまつてことだ。」

と俺はいいながら病院を後にする。

もうすぐ修学旅行の日だった。

- end -

第8話（38話）修学旅行（前書き）

すみません。前回投稿する話を間違えていました。

前回をもう一度見ておいてください。

誠に申し訳ございません。

もし前回を見た場合は今回のをバスして下さい。o_r_n

この小説に出る登場人物の名前は実際の団体名・個人名とは一切
関係ありません。

今回も小説を読んでいただきありがとうございます。もしよかつたら、評価・感想・お気に入りを宜しくお願ひします。

第8話（38話）修学旅行

6月 日

今日は修学旅行で北海道へ行く。

前田に荷物などを用意していく事情を//イナに話してイナは綾乃たちがあざかることになった。

もし何かがあつたら時のために。

朝7時に成田空港の国際線ターミナルの受付口13番の前に集合だつた。

成田空港まで少し遠いから空港と繋がっている特急を使つことにした。

そして朝7時。

「はい、みなさん集まつたね。」
と学年主任の鬼頭が言つ。

びつやう全員そろつてこるようだ。

「おはつよー海藤ーー！」

とこつものよつて海藤が話しかけてくる。

「お前・・・いつもそんな格好してんのか・・・」
と普段見れない私服を見て聞く。

「今日は少ししかつこつきてるんだよ。 海藤は・・・普通の格好だな。」

と斎藤は言つ。

「当つ前だらう。 なんで修学旅行で格好つけねえといけねえんだよ。」

「

と俺は言つ。

「お前は・・・わかつてねーな。 ほれ、近藤見てみるよ。 あの格好すげえだろ?」

と真菜を指でさしながら斎藤は言つ。

「なあ? めひやくひやあの服ええやんか? 人つてよ ファッショングで変わらんんだぞ・・・」

と斎藤は説明する。

「へいへい、わかつた分かつた。 ところでグループは俺と斎藤と近藤じやなかつたか?」

と俺は言つ

「札幌市内分はうだ。 寝るとまは違つぞ~」

と斎藤は言つ。

「そこまで俺は聞いてねえぞ。」

と俺は言つ。

そんな会話をしていたら先生が航空券を渡してくれた。

「12Dか……お前はどうだ?」

と俺は聞く

「俺は13番のAだぜ。」

と斎藤は言つ。

そしてみんな飛行機に搭乗した。

「13番のDと……」

と探しているその時だった。

なんとなく後ろから田線を感じた。

すぐに後ろを向いたが俺を見ているような人はいなかつた。

・
・
・

1時間半後俺たちは新千歳空港に着いた。

「北海道だーー!!」

と斎藤は着いた瞬間に叫ぶ。

降りた後に今日初めて小鳥坂を見た。

「お前いつもと私服が違つじゃんか。」

と俺は聞く

「あんたね・・・修学旅行に私服なんて着るわけないでしょ？ 常識ないわね。」
と小鳥坂は言つ。

「じゃあ・・・少し気にしてるって訳か・・・」
と俺は言つ

「違いますーー！ そんなわけないでしょーー！」

と小鳥坂は言いながら先に行つた。

・イギリスト

2週間前、ある大学にて
「ところでおクターアンドレス。 本当にこんなことをしていいのかね？」
と一人が言つ。
「何を言つてんですか。 これがあなたの実験に使われる命ですよ。
そこら辺のアホな奴はオリジンパワーに夢中になつて簡単に命を渡すぐらいなアホなんですから、僕はその命より欲しいのは新しいパワーを作ることですからね。」
とソラ。

「ならば、お前の力にもなれるようにこの実験を頑張ろうか。 それよりお前は今から日本へ行くみたいだな。」
とソラ。

「そうですね。僕の予想だとこれからお偉いさんたちが面白いショーでも見してくれるそうですから僕もそれを現地で見たいのでね。」

と並べ。

「相変わらず変な奴だなお前は。好きにしや。いつかが出来たら連絡をする」「いつが出来たら連絡をする」

と言い話は終わった。

・・・・・

「なあ海藤。 やはり北海道って言つたら蟹やんか。 蟹食べにい

」

と齊藤は並べ。

「ちよつとー齊藤！ 昼からそんな高いものを食べるの！？ ありえないでしょ。 蟹はよるでしょ！」

と近藤 真菜は並べ。

そう、今 僕たちは札幌市内分散を行つてゐるところ。班は僕と近藤と齊藤。2人は昼飯で喧嘩をしている。

「ならさ・・・昼は簡単にあそこで済ませよつぜ・・・」
と2人に某ハンバーガーショップを指して並べ。

2人はその店を見てお互い了承を取ると店の中に入る。

「やつぱり迷つた時はこいよね~
と近藤は並べ。

「なんかいつも食べてる味やけどまあこいつこいつこいつこいつ便利やな~
と齊藤は並べ。

「わざと、この時間のまま行くと次の田舎地までまちがいだな・・・」

と俺が言ったその時だった。

「（田線を感じる・・・誰かにつけられているのか・・・）」
と思ひ。

「どうしたのー? 老樹! ー?」

と真菜は叫ぶ。

「いや、なんでもない・・・」

と俺は叫ぶ。

「わ・・・お前ら・・・お前で呼び合ひ関係やつたんか・・・
と斎藤は叫ぶ。

「ち・・・違うってー! ちうこいつ意味じやー! ー」

と真菜は叫ぶた時

「ここを早く出よう。」

と俺は叫ぶ。

・・・・・

何なんだこの田線は・・・朝空港に着いた時から感じる・・・
ましては尾行されている感じだ。

俺たちは無事に観光を終えホテルに戻った。偶然1階の受付前に小

鳥坂が居た。

俺のことを知っているのは二つと真菜だけ。とりあえず状況を話した。

「北海道に来てまで！？ あんた・・・気のせいじゃない？ 二二までわすがに来れるとは思わないんだけど・・・」

と小鳥坂は言つ。

それもそのはずだ。俺たちは朝早く東京を出でいる。それに術者狩りはそこまでお金を払い北海道まで来るのか・・・

と考えていた。

「とりあえず・・・私も気を付けてみるわ・・・」

と小鳥坂は言つ。

「明日は北海道のバスツアーに参加します。 朝7時半に下で朝ごはん。8時半には出発だから」と学年主任は言つ。

皆、各部屋に戻り22：00には消灯だった。同じ部屋には斎藤も居る。

いきなり斎藤がトランプをじょりと言つて全員で夜遅くまでトランプをしていた。

・・・・・

朝7時に起床し7時半に朝食をとり8時半にはバスに乗ることつ手

定通りの動きで動いた。

このバスツアーが最悪になることも知らずに。

俺たちは普通通りにバスに乗車する。

バスに乗って都市高速に乗りバスの中はバスレクとかで大盛り上がりだった。

高速道路を走り出して20分後ぐらいだった。

1 · ·
2 · ·
3 · ·

とカウントするようにバスは距離を縮めていた。

すると急にバスが大きな音を立てて爆発をしバスは横転してしまった。

「うわあああ···」

とバスの中の生徒は言つ。

「何が起きたんだ！！」

とバスの中はパニック状態だった。

運転手が

「左側と後ろの非常口を開けて！！」
と叫ぶ。

バスの中は煙です』」かつた。

「先生！！ 後ろに車が衝突していて非常口が開けられません！！」
とある人が言つ。

俺もあまりにもの衝撃で少し目が開けれなかつた。

目を開けると生徒の中には頭から血を流していたりしている生徒も
いた。

この時みんなは事故だと思つていた。

「先生ー」じつちの非常口は開かれました！
と生徒が言つ。

運転手が

「バスの窓側にある赤いハンマーで窓ガラスを突き破つてください
！」

と言つ。

俺はちよづび一一番窓側に近かつたから仕方なく生徒を踏みながら窓
ガラスを割つた。

そして俺は先に外に出て生徒の手を引っ張りながら引きづりあげた。

・ · ·

「事故にしては煙がすごい···」

と俺は思っていた。

全員出てきたときには救急車とパートカーがやってきてた。

俺はとりあえずバスから離れよつと思い1メートルぐらい来た道を戻つていった。

すると道路に四角い何かが焦げて落ちていた。

「（爆弾！？）」

と俺が思った時後ろから小鳥坂が走つて俺を突進した！！

「危ない！！」

とその時その四角いものは爆発をした。

ドーン

いつたいなんなんだ。

爆弾は爆発したがこの爆発による被害は何も出なかつた

「大丈夫！？」

と小鳥坂は聞く。

「ああ大丈夫。ありがと。しかし、なんでこんなことが・・・」
と俺は聞く。

術者狩りよ・・・と知つてゐる小鳥坂だが責任を負わせないために言わないことにした。

「なんかの事故わよ・・・」
と小鳥坂は言つ。

「そりか・・・しかし何の目的・・・」
と俺が言つた時

「あ、先生が向こうで呼んでいるわ・・・」

と小鳥坂が急いでいい2人は戻る。

・・・・・

俺たちは警察のバスを使用し治療が必要な生徒は病院へ、必要なない生徒は署の講堂へと運ばれた。

警察は事件の調査に忙しそうだった。

真菜と斎藤は治療が必要と判断され病院へ運ばれたが俺と小鳥坂は必要がないと判断された。小鳥坂は誰かと携帯で話していた。

その時俺の携帯に電話がかかつた。相手は綾乃からだつた。

「もしもし」
と電話に出る。

「あ、ザックスさん！――ユース見ました！――怪我の方は！」
と急ぎながら綾乃は言つ。

「ああどうにか大丈夫だった・・・まあけが人は酷いがな・・・」
とまるで他人事のように言つ。

「そうですか・・・ならば私の話を真剣に聞いてもらいますか。それとその話を聞いて自分が全て悪いと思わないですか？」
と綾乃は言つ。

「どういつ意味だ！？」
と俺は聞く。

「とにかく私の話を聞いて自分で全ての責任を取らないことを約束してくれますか！？」

と綾乃は言つ。

「ああ・・・わかった。だからなんだ。」
と俺は聞く。

「これは事故ではないです。事件です。それもテロでもなく偶然でもなく・・・術者狩りの仕業です。」
と綾乃は言つ。

「ー？」

「おそれらぐ、術者狩りはあなたを追跡しそこにオリジンパワーが居ると思っていたんでしょう。バスを爆破させるまでなかつたのに・・・
・とにかくそういう訳です。」

「それは・・・本当か？」
とザックスは聞く。

「まだ詳しいことは分かりませんが・・・まだ何が起きるかわからないので注意して下さい。」

と綾乃は言つと電話を切つた。

自分で全ての責任を取ろうとしないでください。

この言葉が頭に響いた。

- e n d -

『事件は昨日の朝、札幌市内の都市高速道路で修学旅行をしている生徒が乗つてゐるバスを狙つた爆発テロが発生しました。生徒92人中34人が乗つてゐる1台のバスが爆発し23人が負傷します。また北海道警察は犯人の行方を探してます。警察によりますと爆弾は道路に設置されていて何者かが遠隔で操作をされたものと。』

今日はこのニュースがずっと流れていった。

東京にいる他のみんなは心配していた。

俺のせい・・・か・・・

と思つていていたがやはり綾乃の言つてたことを思い出してしまつ。

全てあなたが責任を負う必要がない・・・か・・・

1晩が空けとりあえず俺たちは東京へ帰ることが決まつたしかしそれがテロの可能性とすれば飛行機は危ない。ということで急に新幹線で帰ることになった。

けがをしてゐる生徒は北海道に残ることになった。俺たちは警察署

の講堂の中で待っていた。講堂は結構広く警察は寝袋や食料まで出してくれた。

すると小鳥坂が俺のところへやつってきた。

「ねえ、警察の人人が・・・」

と小鳥坂は言つ。

「どうやら俺たけと話をしたいしそうだ。」

俺と小鳥坂は警察に誘導されながらドリマとかで見る取調室・・・ではなく学校の応接室みたいなところに呼び出された。

「ああ海藤君に小鳥坂さん。忙しいところめんね。」
と話すのは今回の事件を担当する警察官だった。

「話は全て春田教授から聞いているよ。ああ自己紹介を私は今回の事件の捜査を担当する増田です。」

と増田は言つ。

「春田から聞いてどうですか?」
と俺は聞く。

「ああ春田教授は私の姉。結婚してから春田になつたの。まあそんなんことははどうでもいいけど。今回は事件と見るより・・・テロと言つた方がいいかな。」

と増田は言つ。

「まあ海藤君はオリジンパワーと言われる起源の力を持つている子と一緒に住んでいるんだよね。それで術者狩りという集団はそのオ

リジンパワーを狙っている。それで、今回のテロは早くオリジンパワーを奪おうと何者が仕掛けたものだ。ああ、そうだ、海藤君に一つ言つておかなければならぬ

「と増田は言つ。

「君が全て責任を取る必要はないんだ。何も君が悪いわけじゃない。

」

と増田は言つ。

「わかつてます。でも・・・このままじゃ被害が・・・」

と俺は言つ。

「そのために君たちには僕たちの作戦に従つてほしいんだよ。これも姉と一緒に作つたんだが。まず、他の生徒は新幹線で帰ることになつたよね。もし、そこに君たちが居たらまたテロが起きる可能性がある。だから君たちには少しだけここに残つてもらいたい。ただそれだけさ」

あまりにもの簡単な作戦で少し驚いたがまあそれぐらいならと思つていた。

「わかりました。そうします

と俺と小鳥坂は言つ。

「そう、とりあえず2人だけだから1室部屋が空いているもんではしばらくそこを使つておいてくれ。」

「はい・・・分かりました・・・あれつ・・・部屋・・・

2人・・・1室・・・」

と黙つ

「つておいー！ なんで2人なのに1室！？ おかしいでしょ！？」

と俺は言つ。

「そ・・・そつよー！ なんで私が！？ え、？ こいつと一緒に！？」

と小鳥坂も言つ。

「まあまあ・・・2人とも落ち着いてくれ・・・ 1室しか空いていないんだ・・・」

と増田は言つ。

・・・・

2人は部屋に案内され部屋に入る。

「あんた・・・風呂場で寝なさいよ・・・」

と先に小鳥坂に言われる。

「はいはい・・・分かりました。」

と俺は言つ。

「ここの警察署とは思えないほどホテルみたいな感じの部屋になつていた。」

とりあえず俺は外の情報が欲しいなと思いテレビをつける。

コースはこの事件について言つていた

ずっと二コースで言つてゐるなーと思つていると突然外からパトカーのサイレンが鳴り沢山のパトカーが外へ出て行くのが見えた。

そして二コースも突然切り替わり

『速報です。昨日のバス爆破事件で生徒が運ばれた病院に生徒を人質にした立てこもり事件が発生しました。病院の関係者によりますと犯人は不思議な力を持つてることから術者ということが分かりました。警察は現在・・・』

といつ二コースだつた。

「おい・・・どういふことだ・・・」

と俺は言つ

「立てこもり? なんで病院に・・・」

と小鳥坂は言つ。

すると部屋の内線電話が鳴つた。

「もしもし・・・」

と俺は出る。

「ああ海藤君。今二コースは見てるかね?」

と増田の声がする。

「はい、見ました。いつたいどういふことが・・・
と俺は言つ。

「まだこっちにも事情が分からぬんだ。とつあえず言いたい」とは君たちはこの部屋・警察署から出ないでくれ。」

とされ、増田は電話を切る。

「何の真似だ。・・・」
と俺は思う。

ニュースはすつと速報を言つてゐる。

「ねえ・・・考樹・・・」「

と小鳥坂は云々

「なんだ…」

「あんた・・・」の事件全部あんたが悪いと思つていい?」
と小鳥坂は聞く。

「やつだな・・・やつ思つてこな」と俺は言つ。

「もうよね・・・ そう思つてるよね・・・ じゃあ私達このまま待機していくいいのかしら」と小鳥坂はいい。

「 そ う だ な ． ． ． ダ メ だ な ． ． ． 」
と 俺 は 言 う。

「ならば・・・私にいい方法があるの・・・」
と小鳥坂は言つ。

・・・

東京。

「しかし、大変なことになったな。」

と裕太はみんなに言ひ。

「本当にやうだね。でも北海道まで術者狩りが行くなんて。」

と透哉は言ひ。

「やうりん狙つてこののはザックスではなく//イナちゃんなんだよね」

と綾乃は言ひ。

「とつあえず、俺たちが出来る」と//イナを守ることだ。ザック
スのためにもな」と裕太は言つ。

・・・

一方ロンドンでは・・・

全員、術者による講堂に集まつていた。

「ねえどうしたんですか?」

ヒルメリは聞く。

「どうやらボスが急に話したいことがあるって・・・」

とキリヤは「う。

「そ、うなんですか・・・・」

トルメリは言つ。

すると舞台上にボスがやってきた。

「みんな、集まつてくれてありがとう。少し話したい」とあるんだ。最近のロンドンはなぜか平和になつてきたんだ。あの時のように俺たち術者を術者狩りが襲つてくることも無くなり普通に平和に過ごしている。それはなぜだかわかるか……」

「奴らは目的を変えたんだ。発見されたオリジンパワーへと。それに奴らはオリジンパワーがここにはないということを知り日本にあることが分かつた。そのオリジンパワーとは・・・ミイナイルの事。ここに知らない人はいないだろう。お前らも知つていい通りオリジンパワーを使用すればこの世界だって破壊が出来る。それを術者狩りどもは考へてゐる。奴らはこのイギリスを世界の頂点まで持つていきたいと・・・まあこの話は中にも知つてゐる人はいるだろう。だが、俺はそれだけが言いたいん訳ではないんだ。

とボスは言う。

「イギリスは早くそれを求めたいため俺らの第2の故郷・・・日本に戦争を起こす。」

とボスが言つた途端、皆がシーンとなつた。

「おい・・・ボス・・・それはどうこうことだよ・・・」
と一人が言う。

「俺たちは・・・またイギリスの武器に敗れるんだ・・・」
とボスは言つ。

「もう、戦争は起きないんじゃないのー?」
とキリヤは言つ。

「イギリスは本気でオリジンパワーを必要としている。そんなことであれば戦争なんて起こすだろ? だが日本相手じゃ俺たちも出来ないがそろそろ命もないだろ? ・・・」
とボスは言つ。

「そんなの無理よー! 要するに・・・オリジンパワーをイギリスに渡すわけでしょー? 世界を破壊する」ともできるんでしょー?
それに持つてこるのはミーナちゃん・・・」
とキリヤは言つ。

「もちろん、その通りだ。それにお前たちがオリジンパワーを持つて帰るとしても無駄だ。」

とボスは言つと皆は意味が分からぬような顔をしてくる。

「ミーナの隣にはザックス・アンデレスがいるからな・・・」
とボスが言つとみんなは驚きを隠せなかつた。

「ザックスがミーナを守つている。そのために俺は2人を日本に送つたんだが・・・間違いだつた。こんな戦争になるとは思わなかつた。」

とボスが言つと

「おーおー！…ザックスにかなう訳ないじゃないか！俺らの力じゃ無理だよ…」
と一人が言った。

「だが従うといつのはオリジンパワーをイギリスまで持つていいくこと…それが出来なければ命は…」
とボスは言った。

皆は黙り込んでいた。

・・・・・

「おー、こんなんで大丈夫なのか？」

と俺は聞く。

「うん、まだ大丈夫みたい。」

と俺たちは部屋から出て下のフロアで隠れている。

「あ、来た！」

と小鳥坂は言いつと俺たちは講堂から出てきた同じ学年の中にも隠れた。

小鳥坂は連絡をしていた友達にお礼を言つてくる。

「おーおー！」と叫びながら外へ出ることが出来た。

俺たちは外にか外へ出ることが出来た。

すると小鳥坂は「おーおー！」と叫んで病院の方へと走つていった。

・・・

一方病院では。

「増田係長！ 犯人からの電話です。」
と部下は言つ。

増田は早くも現場にいた。

増田は車の中に戻り電話に出る。

「もしもし」
と増田は言つ。

電話の奥からは小さい声で英語が聞こえた。

そして

「あ・・・あの・・・僕は病院の外科担当の石田です・・・その・・・
英語を翻訳するためにこいつを使っている・・・と言つてこます。」

と石田は言つ。

「わかつた・・・」
と増田は言つと

「あ・・・あの・・・犯人が言つたこと以外を話すと首を斬る、それ
と・・・そつちからの質問はなしだ・・・と言つてこます。」
と石田は言つ。

「それでいい」と増田は言う。

「とりあえず……犯人が言っているのはここにオリジンパワーを
よこせ……そして明日までによこさないと……」いいつの命と…
・生徒の命は燃やす……と言つてます……」
と石田が言つと電話は切れた。

「（オリジンパワーをどうやって……）」
と増田は思った。

「こちら増田だ。犯人は英国人。中の人質は外科の医者の石田と生
徒15人だ！！」
と増田は言つ。

そして増田は電話を取り出して春田に電話をした。

・・・・

「ここが裏口みたい・・・

と小鳥坂は言う。

どうやら病院まで来たみたいだ。

「私はここで待つている・・・ それと・・・カードを選んで。」
と小鳥坂はカードを出した。

「わかつた。ソードを借りるよ。」
と俺は言つ。

そして俺は裏口の扉を破り中へと入つていった。

- e n d -

第9話（39話）ティエラス・アンドレス（前書き）

この小説に出る登場人物の名前は実際の団体名・個人名とは一切関係ありません。

今回も小説を読んでいただきありがとうございます。もしよかつたら、評価・感想・お気に入りを宜しくお願ひします。

なんかこれからだらだら書いていくことになりそうだし

第9話（39話）デイビス・アンドレス

「デイビス・アンドレス。 病院に不審な人物が入りました。」
と一人が言つ。

「知つてゐる。 面白い奴が入つてきたな。 特に何もする必要な
はいぞ。」
とデイビスは言つ。

・・・・

ザックスは一人歩けるくらいの病院の廊下を歩いていた。

ザックスは1室1室確認していくが同じクラスの奴は居なかつた。

奥の方を歩いていくと1室だけ明かりがついていた。

「（あそこだな・・・）」

と思つたザックスは慎重に歩いて部屋に入ろうとした。

ドンー！

と突然銃声が聞こえ弾が頭の隣をすれすれにとおつていく。

「あ・・・あの・・・」
と石田は言つ。

「待たせたな・・・」

と俺は目の色が変わっていた。

そしてザックスは英語でオリジンパワーや自分のことを話した。
どうやら相手は術者狩りの中でも上の方だと言つていてここにボス
もこると言つている。

相手は銃を捨てて術で攻撃してきた。

俺は借りたソードを使い止める。

「術者狩りのコピーの術はこんなもんなんかよーーー！」

と俺はいいダークボールを打つ。

相手に当たつた。

しかし相手は攻撃を止めない。

「困ったやつだな・・・ ダークインパクトーーー」と打とうとした時だった。

「待てーーー！」

と声が聞こえる。

「そんなやつと相手をする時間があるなら・・・」
と男は言つと俺の後ろから相手が攻撃をしてきた。

しまつたと思ったが相手はその場で倒れてしまった。

「所詮命がない奴だ……こんな奴はこのコモロンで殺す」とも
できるんだよ」
と男は言つた。

俺は警戒していた。

男は部屋に入つてみるとやはり顔が見えた。

「はあ・・・・・・・・も・・・・・・もしかして・・・・・・」
と俺は声を上げる。

・・・・・

その頃病院の外はザックスの攻撃の爆音を聞いて大騒ぎだった。

「コースでもそのことを言つてた。

「黒い光・・・・ やはり来たか・・・・ ザックス・アンドレス」
と増田は小声で言つた。

「ひから増田。突撃部隊は元の位置に戻れ。病院の中は大丈夫だ。」
と増田は言つた。

「と・・・・・と・・・・父さんー?・・・・・」
と俺は言つた。

「ザックス……」なんといひで会えるとはな……
ヒービスは言つ。

「何を……何をしてるんだ……父さんは……
と俺は聞く。

「ちょっとした実験を……」

そう、父さんはイギリスに居たときでもあまりあつたことがない。父さんは大学の科学者。何をしていたかは知らないがいつも大学に残つていて家にはほとんど帰つてこない。もう父さんの顔は忘れていたが今、思い出したんだ。

「本当のことを言おう。ここに来た理由はお前のためだ。お前がオリジンパワーと言われるものと近くにいることがわかつて危険だと思つたから連れ戻しに来たのさ。」

「それが本当の事なら……人質する必要はねえだろ……
と俺は言つ。

「悪いがここにはそのオリジンパワーといわれるものはないんだ。今すぐ人質を離してくれ、俺のクラスメイトだ。」

と俺は言つ。

「まあ……目的がオリジンパワーだけではないんだがな……
今頃オリジンパワーはどうなつているんだろうか……」

ヒービスは言つと煙玉を取り出し逃げていった。

「くつ・・・・・」

俺は煙で前が見えなかつた。

人質にされたクラスメイトは無事にベッドで寝ていた。俺は急いで窓を開け煙を外に出した。

すると向いから小さな声が聞こえた。

「あ・・・・・」

俺はその声をたどつて急いで向かつた。

真菜が田を覚ましたそうだ。口には酸素を配る用のマスクをしていたので声が聞こえなかつたんだ。

俺は急いでマスクをはずし話を聞く。

「また・・・助けられちゃつたね・・・

と真菜は言つ。

「何も気にすることはないんだ。これは俺の問題だからな・・・
と俺は言つ。

「そうなのね・・・私は待つてるからね・・・
と真菜は言つと俺はうなずきマスクを戻した。

俺は急いで出口へと向かつた。

出口には小鳥坂が待つていた。

「ここを誰かが出て行かなかつたか……」
と俺は冷静に聞く。

「誰も来なかつたわよ……それより……その傷……」
と小鳥坂は言つ。

「先回りされたみたいだ。急いでいかなきや……」
と俺は言つと小鳥坂を連れて駅へ向かおうとする。

そして途中に警察の増田に会つた。

「中の様子は……」
と増田は聞く。

「大丈夫だ……誰も怪我はない。それより病院から出て行く男を見なかつたか？」
と俺は聞く。俺が大丈夫だと言つた瞬間に救助隊が病院へと入つて
いった。

「ああ……突然病院の裏からヘリコプターが飛んでいったのは
見えたが……あれが犯人か……」
と増田は言つ。

「そいつを俺は追わなきやいけない。俺は先に帰る。」
と言つと俺と小鳥坂は向かつた。

「ちよい待て」

と増田は言つと新幹線のチケットを渡された。

「姉貴からすべて聞いている。時間に遅れんなよ。」

と増田は言つ。

俺はおひ。と言い駄へと向かう。

・・・・

その頃のミイナたちだった。

「綾乃！！術者狩りだ！！」

と言つのはどうやだつた。

ちょうど3人は綾乃の部屋に集まつていた。ミイナが家に来ていたからだ。

「こんなとき」・・・
と綾乃是言つ。

するとミイナが突然・・・

「あ・・・　み・・・　みんな伏せて！！」
と言つ。

すると突然部屋に火がついた。

「うわあ・・・」

とみんなは言つ。

「わ・・・　私に任せて・・・」

とミイナは水の術を使おつとするが

「今は逃げるぞ！！」

と裕太は言う。

「でも・・・」

とミイナは言うが綾乃が連れて行く。

外の廊下に出ると術者狩りがアパートを囲んでいた。

「つち・・・ばれてしまつたんか・・・」

と裕太は言う。

そして4人は廊下に出て逃げれない状態になる。火はどんどん迫つてくる。

「（ザックスとの約束・・・）」
と3人は思つていた。

そして裕太とどうやは攻撃に向かつた。

「綾乃！隙を見てミイナを連れて行け！」
と裕太は言う。

「わかつた・・・」
と綾乃は言つ。

・・・・・

新幹線の中。

「ねえ考樹・・・いつたいビジュしたの・・・
と小鳥坂は聞く。

「病室の中で俺の父さんに会ったんだ・・・
と俺は言つ。

「お父さん！？ お父さんは・・・術者狩りなの・・・？
と小鳥坂は聞く。

「違うと思う・・・父さんは科学者だ・・・何と関係するかわからんがオリジンパワーを狙っているのは事実。急がないといけないんだ。」

と俺は言つ。

小鳥坂は聞かない方がいいと思いそな。と返事をする。

「そういえば日本には術者が何人いるんだ？」
と俺は聞く。

「まず、あの3人と私。たしか春田が言うには・・・全員で7人だつたかしら・・・あんたの恋人も合わせたら8人だつたんだけどね。」

と小鳥坂は言つ。

「そうか・・・他の奴は大丈夫なのか・・・
と俺は心配をする。

・・・

・・・

東京。

綾乃是ミイナを連れて逃げようとしていたが術者狩りはアパートを囲んでいて動くことが出来なかつた。

「（こ）のままじゃいけないわ・・・」
と綾乃是思つ。

裕太たちはアパートから飛び降りて術者狩りの相手をしようとしている。

「透哉！無理をするんじゃないねえぞ！-！」
と裕太は言つ。

「大丈夫！」
と透哉は言つ。

するとある術者狩りが

「おい！オリジンパワーはあつちだ！-！」
といつとみんながそつちへと行つた。

「（やばい・・・）のままじゃ・・・由紀ひやんが・・・」

と綾乃是思つたが術者狩りは早く襲つてきた。

裕太たちも急ぐことが出来なかつた。

「（ダメだ・・・）」

と綾乃が思つた時だつた。

ドーン。

とこつ爆音とともに襲つてきた術者狩り達が吹つ飛んで行つた。

「（いつたい何が・・・）」

と綾乃は思つていた。

裕太たちはこの時間でここまで来れることは出来ない・・・

「悪いのですが・・・同じ術者を傷つけてもらうのはやめてもらえるでしょ？ 同じ術者が見ているととても腹が立つて殺したくななるからね。 すぐに引くのが無難ですよ？」

と見たことのない男が言つている。

「（術者なの！？）」

と綾乃は思つ。

「うるせえー 邪魔すんじゃねえぞ！！」

と術者狩りが言つとほかの術者狩りも襲つてきた。

「なるほど・・・要するに術者狩りはバカということなんですね・・・

・・・ならば」）で命を捨てろ。」

と男は言つと地面に手を着けた。

すると地面が手の方に向にまつすぐと切れていぐ。

「（いや）んな術見たことない……」

と裕太は思つ。

・・・・

術者狩りはその男によつて全て片づけられた。

「えつと……その……ありがと。」

と裕太は男に聞く。

「気にしないでください……あなた達も術者なんでしょう？ 同じ立場なんだから助けないわけがない……」

と男は言つ。

「ああ俺は山崎 裕太。 銃術師つて呼ばれてるんだ。」

と裕太は言つと綾乃たちも紹介する。

「俺は古賀 巧 この通り地面を扱う術。 日本語名ではないからグランジマジシャンと呼ばれてます。」

と巧は言つ。

「（いや、）この通りって言われてもわからないな……」

と透哉は言つ。

「それより、今回の事態はもう少しあん知つています。 その子がオリジンパワーなんですね。」

と巧は言つ。

「今は、俺たちがあずかっているんだが元々は海藤 考樹でいうやつが世話をしている。」

と裕太は言つ。

「ザックス・アンドレスですね。」

と巧は真剣な表情でいう。

裕太たちは何があるのかと思つたが

「こんなところでザックスさんに会えるなんて光榮すぎて・・・もうおかしくなりそう・・・」

と巧が言つた時4人は驚きの回答に驚いた。

「なるほど・・・すぐに会えると思いますよ。」
と透哉は言つ。

「とりあえず、ここは危険だ。由紀のためにも逃げよ。」
と裕太は言つと5人は場所を移動する。

・・・

ある車の中。

「オリジンパワーは見つかったか?」
とティビスは助手席に座っている男に聞く。

「いいえ、まだ捜索中です。」
と男は言つ。

「 捜索中とは・・・誰かが術者狩りを消滅させたのかね？」
トイデイビスは聞く。

「 おやぢやう思われます。」
と男は呟つ。

「 さすが、俺が作った武器だ・・・あんなゴミたちなんて簡単に殺せれるだらうな・・・もうすぐ俺の夢が完成する・・・」

- e n d -

第10話（40話）幻想（前書き）

ども、いつも読んでいただきありがとうございます。

時々日本語がおかしいけど勘弁してください。

時々サブタイトルどこが関係あるの？って感じになるけど勘弁して下さい。

時々意味が分からなくなるけど勘弁して下さい。

とにかく勘弁して下さい

この小説に出る登場人物の名前は実際の団体名・個人名とは一切関係ありません。

今回も小説を読んでいただきありがとうございます。もしよかつたら、評価・感想・お気に入りを宜しくお願ひします。

第10話（40話）幻想

40話

俺と小鳥坂は東京駅へ着いた。

「小鳥坂……お前は先に由紀のところへ行つてあげてくれ。」
と俺は言つ。

「え……どうして？　あの子たちあんたの助けが必要なのかもしれないわよ？」

と小鳥坂は聞く。

「俺の助けの代わりにお前に行つてくれつて言つてるんだ……」
と俺は言つ。

「……」

小鳥坂は黙り込む

「俺は少しやらなきゃいけないことがあるんだ……約束してくれるか……？」
と俺は言つ。

「わかったわ。その約束……私が受けれるわ……」
と小鳥坂は言つ。

そして小鳥坂と俺は別れて行つた。

・・・

別れた後、俺は真っ先に春田のいる大学へと向かつた。

あいつは大学に住んでいると同じもんだ。

大学の門では春田の知り合いだ。と言えばすぐに入れた。

そして俺は春田の研究室へ向かつた。

コンコン

と俺はノックをする

「どうぞ。」

と中から声がする。

俺はすぐに中へと入つた。

「あら、海藤君ね。大丈夫だった？」

と春田は聞く。

「ああ、大丈夫だった。俺は少し前にお聞きたいことがあるんだ。」

と俺は言つ。

「答える範囲なら答えるわ。」

と春田は言つ。

「結構だ。」

お前は俺の父でもあるティイビス・アンドレスについて

何かを知っているか？」

と俺は聞く。

「ええ、知っているわ。 あの人は私をここまで作り上げた人と一緒だから……」

と春田は言つ。

「知っているんだな。 俺は奇妙なことに北海道の事件が起きた病院で俺の父に当たるデイビス・アンドレスに会つたんだ。 正直顔は覚えていなかつたが。 もう16年ほどあってないからな。 母さんの葬式にも出なかつた奴だ。 なぜそいつがそこにいる。」

と俺は聞く。

「詳しいことを言つと……私の首も飛んでいくからヒントだけ教えてあげるわ。 あの人はあなたを産んだ父でもありあなた達の力を作った人でもあるわ。」

と春田は言つ。

「！？」

「そんな彼が今、ある大きなプロジェクトを進行しているの。 それを成功させないと彼は納得いかないみたいでね。 これがヒントだわ。」

と春田は言つ。

「やうか……俺のもやもやが全て無くなつた。 ありがとな。」

と俺はいい部屋を出ようとした時だった。

「待つて！！」

と春田は言つ。

「あなたはオリジンパワーを守り抜く必要があるわよ・・・」
と春田は言った。

「当たり前だろ？それが俺の役目だ。」
と俺はいい出していく。

今の春田の言葉がヒントではなく答えに聞こえた。

・・・・・

「しばらぐへじて離れていればいいと思します。」

と透哉は囁く。

「ここは透哉の実家の地下シェルターだった。あんまり意味がなかつたが緊急時のために作られていた。冷暖房もついていた。

「しつかし・・・どれだけの術者狩りが居るんだよ・・・これじやあキリがないな・・・」

と裕太は言う。

「そうですね・・・ところでザックスさん達は大丈夫でしょうか・・・」

と綾乃是心配しながら囁く。

「大丈夫だよ・・・ザックスなら・・・必ず助けてくれる・・・
とミーハナは囁く。

「あつ・・・」

ミイナは突然声を出した。

「どうしたのー?」

ヒカルの日記

トミーナは完全に田をぬぐし口を開けて小さな声で呟いていた。

するとミーナは急に動き出してシェルターから出て行こうとしていた。

「どうしたのー? 由紀ちゃんー?」

とみんなが言ひ。

「おこー由紀を上めるやつーー！」

卷之三

ミイナはいきなり走り出して外へと走つていつた。

一 ザツ ケス ． ． ． ． ． ザツ ケス ！ ！

といながら、イナは走っていく。

「お嬢ちゃん……ちゃんと前を向いては知つていかないと危ないよ……」
と男がミイナに声を掛ける。

「あ・・・・」

ミイナは言ひ。

「わひと・・・俺とぶつかったわけだから・・・死んでもうおつか・・・」

と男は言ひミイナに攻撃をしていく。

「うわあああああ

ミイナは言ひ。

すると誰かがミイナの体を掴んで飛ばして行った。

「う・・・」

ミイナは目を開ける。

「美・・・美月!？」

ミイナは言ひ。

「あんた・・・勝手に行つたら危ないっていうことがわからないのかな・・・こんなに町は術者狩りでいっぱいだつていうのに・・・」

と小鳥坂は言ひ。

小鳥坂は背中に少し傷を負つていていた。

「あんたはあこひのとこに逃げておきなさい・・・」

と小鳥坂は言ひ。

「確かに・・・裕太だつたわよね・・・ その子を連れて非難しなさい・・・」

と小鳥坂は言ひ。

「おう・・・わかった。」

と言い裕太たちはすぐに場所を移動する。

「簡単にオリジンパワーを渡すわけにはいかないんだわ・・・ これからは私が相手よ！！」

と小鳥坂は言う

・・・・

「（あの人はあなたを産んだ父でもりあなた達の力を作った人でもあるわ。）」

という言葉がザックスの頭の中をずっと再生されていた。

「（あんな人質をする親父が俺の親父なんて認めネエ・・・ それに俺を不幸にさせた力まで作りやがったんだ・・・）」

と俺はずつと思っていた。

俺は走つて全員のところへと向かっていた時だつた急に曲がり角から待ち伏せしていたように術者狩りが現れた。

「おやおや、こんなところでザックス・アンドレスと出会えると言うことは変わらなかつたんだな・・・ならば・・・殺してもいいわけだな・・・・」

と男は突然言つてきた

「どういことだ！？」

と俺が言つた瞬間男は剣を取り出して來た。

「お前は剣を持つていない・・・この期間限定の剣術師に勝てんの

かな？？」

と言つてきた。

俺はひたすらと攻撃を避けていった。

「いい気持ちで戦いにきてんじやねえかよ・・・ 殺せるな殺せばいい」と俺は言い攻撃をしようとした時だつた。

「ぐはつ・・・」

急に術者狩りの男は倒れていつた。そして奥に誰かが立っていた。

俺はまだ攻撃はしていなかつた。

「俺の息子を俺の許可なく殺すんじやねえぞ。」
と奥にいた男は遺体に向かつていつた。

「親父か・・・そいつをまたリモコンみたいなので殺したんだな・・・」

と俺は言つ。

「それも、お前らのためだ。それより、事態は変わつた。今日一九時にこの場所へ来てほしい」と親父は言い紙を渡す。

すると親父はどこかへ消えていつた。

紙には春田がいる大学のキャンパス内の公園だ。そこは都心がすべて見れるようになつてゐる。

「考樹！！」

と後ろから声が聞こえた。

「ああ 小鳥坂にミイナ。」

と俺は言ひ。

ミイナはザックスを見つけると急に元気を取り戻した。

そしてミイナは俺にしがみつく。

「心配してたんだよ・・・ずっと・・・」

とミイナは言ひ。

「もう大丈夫だ。とりあえずここは危険だぞとかへ。」
と俺は言ひ少し離れたところに逃げる。

・・・・

「あ、裕太。小鳥坂さんからザックスさんを見つけて由紀ちゃんも
大丈夫つてメールが着たわ」

と綾乃は言ひ。

「そりか、それはよかつた。いつも報告があるんだが・・・」

と裕太は言ひ。

「事態は変わったみたいだ・・・」

と深刻なように裕太は携帯を見ている。

- e n d -

第1-1話（4-1話）術者の仲間（前書き）

いつも、最近小説の管理が雑になつてきて時々話が繋がつてないかもしれませんがご了承ください。

この小説に出る登場人物の名前は実際の団体名・個人名とは一切関係ありません。

今回も小説を読んでいただきありがとうございます。もしよかつたら、評価・感想・お気に入りを宜しくお願ひします。

4-1話

イギリスト。

「デイビス博士はどうへ行つたのかね？」
と男は言つ。

「はい、現在日本で奴らの監視をされているかと・・・」
と違う男は言つ。

「まあいい・・・なかなか早く終わらないみたいだから」つちも早く動くことは変えないことにしている。リオラ君、道具の方はどうなつたかね・・・？」

と男は言つ。

「はい・・・どうやら・・・なかなか動く気配が無くて・・・」
このままでは・・・」

とリオラが言つた時

「それは予想通りだ。ならば最終手段と行かせてもうおうかね。リオラ君。これを使いなさい。」
と男は言つ。

「い・・・」
「い・・・」
「本当にやる気なのですか・・・」
「指揮官・・・」
とリオラは言つ。

「当たり前だ……早くあの力が欲しいんだよ。これだけの武器があれば、オリジンパワーは簡単に手に入れることが出来る。」
トドードは言つ。

「でも……僕には……」
トリオラが言った時

「行つておくが……できなかつた場合は約束通りだ……」
トドードは言つ。

・・・

リオラはイギリス側の人間であり俺たち術者への連絡などをする係りである。何回も術者側を行き来していると次第に仲が良くなり今では友達感覚みたいだつた。もちろん、今回イギリスが日本へ攻め込むという連絡を入れたのもリオラだつた。術者側はもちろん戦争に行くことを拒否。そんなか今回指揮官のドードはリオラにとんでもないものを持たせこんだ

「（）んなことは僕にはできない……何しろ家族みたいに入れてもらつていた僕が……」
トリオラは思つていゐ。

そしてリオラは俺たち術者が集まる集会所へと言つた。

「あ、リオラ……今日も連絡かい？？」
トリオラを見つけたキリヤが言つ。キリヤとは幼馴染でもあつた。

「ああそうだよ。でも大した用事じゃないんだ。」
トリオラは言つ。

「そつかあ！…じゃあ上がつてよーお茶出すから… そのうちボスも来るよー…」
とキリヤは言つ。

リオラは「」の明るい場が好きだった。リオラも英國系日本人である。本当は術を組み込まれるところだったが小さいころから体が弱く術を組み込ませるのは危険だと判断され術は持つていない。

リオラの父は今の指揮官と同じような立場だった。俺はリオラの父が俺の親父と仲が良かつたためよくリオラから親父のことを聞いていた。

「お邪魔します。」
とリオラはいい上がると

「おおリオラじゅん。久しづり。元気にしてた？」
と聞いてくるのは術者の仲間たち。

リオラはいつもなら「」の雰囲気にすぐ打ち解けるのだが今回は大事な仕事があるからそんなことは出来なかつた。

「ボスもこの階に来るつてや。」
とキリヤは言つ。

「そつか。わかつた。」
とリオラは言つ。

「（そういえば昔はキリヤの事が好きだったなー）
つてリオラは思い出していた。」

そんなことを思い出しているとリオラの心はもつと縛られていった。

そう、リオラは特殊なおいが入っている鉄で囲まれた縦20cm×横20cmの箱を持っていた。その空気を吸うと全員の考へいることを操ることが出来るという特殊なものだった。

それをリオラは置いて帰ると二つのが仕事であつたがとてもこんな空氣じや出来やしなかつた。

「よお、リオラ。」

とボスは言つ。

「こちにちま。」

とリオラは言つ。

「怒られなかつたか?上の方に。」

とボスは言つ。

「大丈夫だつたです。僕もボスの言つてこむことに賛成ですから」とリオラは言つ。

ボスは日本へ戦争に行くことを拒否したんだ。

「そつか。それで今回はどうした?」

とボスは聞く。

「いや・・・上の方から様子を見て」と追て呟かれました・・・

「

とリオラは言つ。

「余計な世話を掛けやがつて あのドードの野郎・・・
とボスは言つ。

2人は一瞬黙りこんだ。

「どうやら・・・何も変化はないみたいですね。」
トリオラは言つ。

「やうだな・・・」

とボスは言つと

「僕も忙しいのでさうさう帰ります。」
トリオラは言つ。

「もう行くのか・・・お前も忙しいんだな・・・
とボスは言つ。

「もう帰るの?
とキリヤも言つ。

「あんまり時間がないからな。」
トリオラは言つと「こを後にした。

例の箱は黙つて置いておいた。

・・・・・

俺は親父との約束通りに春田のいる大学の公園へと向かつた。大学へは顔見知りのため簡単に入れた。

そこはもつすでに親父が待つていた。

「来てくれたんだな・・・」

と親父は言う。

「話を聞きにな。」

と俺は言つ。

「随分と大きくなつたんだな。」

と親父は言つ。

「ずっと見てなかつたからわからねエだけだろ。普通の親ならわ

かるだ。」

と俺は言つ。

「そつか・・・ならば言つ」と先に言つておひつ。

と親父は語りはじめる。

「これからイギリスと日本は戦争を起こす事になつた。戦争と言つても大きな戦争ではない。ごく一部の人間にかかるものだ。当初はそんな話じやなかつたが上の人がそつとうお怒りのようなんだ。」

と親父は言つ。

「意味がわからんねエ」

と俺は言つ。

「親父の言つてることの意味が分からんんだ。なぜ戦争になつた。どうして親父がかわる。どうして俺がかわるんだ！」

説明しろよー！」

と俺は怒鳴る。

「・・・・・」

親父は黙り込む。

「そうだな・・・ それもそのはずだ・・・ お前は何も知らないんだもんな・・・」

と親父は言つ。

「その通りだよ。 それに今は親父の言つてることを信用なんてできねえ。 僕は家族だと思う必要もないと思うからな。 母さんの葬式にでてねえやつの何を信じたらいいんだよ。」

と俺は言つ。

「・・・・・」

親父はまた黙り込む。

「説明したいのは確かなんだ。 でもな・・・ 分かつてほしいんだ・・・ 時間がない。 術、戦争、オリジンパワー、そしてお前がこんなことになつてているのは俺のせいなんだ。 全部俺のせいだ。それを頭のどこかに入れておいてくれ。 僕はこれから俺の道を探す。」

と親父は言つと公園を後にした。

「それなら少し親父の道のヒントを教えよう・・・」

と俺は出でていく親父に言つた。

「オリジンパワーと言われるものはてめーにはわたせねえからな。
と俺は言つた。

「ふつ・・・ 意味が分からねェな・・・
と親父は言つと消えて行つた。

すると話を聞いていたかのよつに春田がやつてきた。

「あんた達は本当に何もお互いのことを知らないのね。
と春田は言つ。

「戦争か・・・
と俺はつぶやく。

「そうね・・・ あなたには一番きつこかもしれないわね。
と春田は言つ。

・・・・・

ミイナと小鳥坂は佑太たちがいる綾乃の家の地下室に行つた。

そこではみんなが集まつていた。

「話はこれがすべてだ。 きっと一番苦労するのはザックスじゃね
えかな。」

と裕太は言つ。

「そうだよね……ザックスは戦うことが出来なくなるかもしけないよね……」
と透哉は言つ。

「ザックス……

ミーナは小さく声で言つ。

「えつと……ザックスって考樹の事だよね……その……イギリスにいる考樹の仲間が考樹と戦うってこと？」
と小鳥坂は言つ。

「やつはいとです……事態は変わってしまったみたいです。」
と綾乃は言つ。

「……」
と巧は言つ。

「でもザックスの仲間を殺すということになると……」
と裕太は言つ。

ミーナは少し暗い顔をしていた。

……

イギリス。

「なるほどな……イギリスもこんな作戦で来たわけか……」
とボスは箱を見ながら言つ。

もつもの時はみんなドアを突き破つて日本へ向かおつとつていた。

「悔しいが……どうすることもできない……
とボスは言つ。

キリヤ達はインプットされた集まる場所に集合されていて全員飛行機に乗せられようとしていた。

「もうすぐ暴れることができるから我慢しておいてね。
ヒードは眠つていてるキリヤ達に声を掛けた。

リオラはそれを見守つていた。

すると飛行機はイギリスを発ち日本へと向かつていた。

「ヒードさん。本当にこんなでいいんですか？」
ヒードは聞く。

「何を言つているんだ。これでイギリスは世界一になれるんだ。
・
・
・誰もが見たこののない方法でな。
」

ヒードは言つ。

・
・
・

『夕方のニュースをお伝えします。一昨日の高校生人質事件で警察によりますと病院に取り残されていた生徒は全員無事が確認されました。生徒は北海道から東京へ返され東京で事情調査などを行つそうです。また犯人などの行方などは現在情報が入つていません。

次のニユースです。』

ニユースでは戦争が起きるなんてひと言も言つていない。

俺は一人家にいた。今は一人になりたかったんだ。 小鳥坂から沢山メールが来ていた。

すると見覚えのないメールアドレスの人からメールが来ていた。

『F r o m リオラ

久しぶりです。ザックス。いろいろと情報を集めてアドレスを調べた。

時間がないから急いで書くね。

今回の事はもう知つて居ると思つ。イギリスと日本が戦争になることは。

そのことで先に謝つておきたいんだけど・・・

俺は君の仲間を日本に送つた。武器として送つた。

いまに思つてとても後悔をして居るんだ・・・
御免なさい。

きつとザックスの事だから仲間への対応は俺と同じことだと思つ。

本当に悪いけど。 よろしく。』

というメールだった。一瞬ふざけているようなメールに見えたが終わったことを言つてもしようがない・・・と俺は思つていた。

『時間がない・・・なぜ全員がいつこうんだ。』
と俺は思っていた。

もつ戦いはすぐそこまで来ていることを知らなくて。

第1-2話（42話）ブラックリスト（前書き）

この小説に出る登場人物の名前は実際の団体名・個人名とは一切関係ありません。

今回も小説を読んでいただきありがとうございます。もしよかつたら、評価・感想・お気に入りを宜しくお願ひします。

第1-2話（42話）フラッシュリスト

42話

俺はとりあえず//イナの事が心配になりみんなが困るといふべくと向かつた。

トントンと俺はノックをする。

ノックをしても誰も反応しない。

俺は
「おーいザックスだ。」
とこいつ。

すると扉が開いた。

「ああザックスさんだつたんだね、驚いたよ・・・」
と警戒心を高めていた綾乃が言つ。

「悪かったわ・・・ちょい気になつてな。」
と俺は言つ。

「そうですか・・・まあとりあえず上がる。」
と綾乃はいい俺は上がる。

「ザックス・・」

といつもより元気がないよ//イナが言つ。

「どうしたんだよ・・?」

と俺は言つ。

するといミイナは走つてきて俺の腰辺りを抱き

「「めんね、全部・・・私のせい・・・私が早く捕まつていれば・
・・こんな戦いには・・・」

といミイナは泣きながら言つ。

俺はそんなミイナに

「どうしたんだよ。急に。俺は一つもそんなこと思つてねえぞ。
俺はもちろん戦うつもりはないし仲間を傷つけたくもない。」

と俺は優しく言つ。

「そりだよ。私もそんなこと思つてないわ。」

と小鳥坂が言つとみんなが続いて言つ。

「ザックス、話が分かっているみたいなら話は早い。
と裕太は言つ。

「ああ、もちろん」

と俺は言つ。

「とりあえず、俺たちもお前の仲間を傷つけたくない。まあお前
だけの仲間じゃないからな、姉ちゃんもミイナもだ。それでいろい
ろと作戦を立てた。その前に紹介しておきたんだ。この人は日本に
いる術者の人、巧だ。^{たくみ}」

と裕太は言つ。

「あ、ザックス・アンドレスさんですよね。はじめまして。本
当は別の形で会いたかったけど今回はこんな形で会つとは思つてい
ませんでした。」

と巧は言つ。

「うわうわ。俺も本当はもつといい形で会いたかったな。」
と俺は言つ。

「やついつわけだ、じゃあ作戦を言ひや。」
と裕太は言つ。

・・・・

裕太はいろんなパターンの作戦を全員に伝えた。

全員小型のGPS付き無線機を持ち外へ出る。全員別々の行動する。

綾乃と透哉はこの部屋に残り透哉はミーナの守り綾乃はPCで全員の位置を確認しながら指令をするとこうことになった。

「それで、目的なんだがな・・・
と裕太は話を続ける。

「多分、ザックスの父さんが何かの手がかりだと思う。」
と裕太は言つ。

「ザックスの父さんが今回の進行役ではないのかと思うんだ。春田
にも電話で聞こえかと思ったが昨日から電話に出ないんだ。きつ
とあそこらへんに何かがあるはず。」
と裕太は言つ。

「でも、考樹の父さんに会つただけで止めることができるの?」

と小鳥坂は聞く。

「それはわからない・・・もしかしたらザックスの仲間たちトイギリストから一緒に来る可能性もある。」

と裕太は言う。

「それは分かり次第綾乃から言つてもういい」と小鳥坂は言う。

「そういう訳で俺は戦いながらその真相をつかみに行く。巧、小鳥坂さんとザックスはひたすらと術者狩り達をミイナから離していくようにしてくれ。」

と裕太は言う。

「割とシンプルな作戦なんだな。」

と俺は言つ

「今回ばかりわな。」

と裕太は言う。

・・・・

大学内

「ねえデイビス。 今回こじまにする必要があるのかしら・・・と春田は言つ。

「俺もそんなつもつはなかつたが上がそつこつているんだ。ビリしよつもない。」

とデイビスは言つ。

「 セウよね・・・ もしオリジンパワーがあなたの物になつたら
どうするの？」

と春田は聞く。

「 とりあえずイギリスはもつと強い武器を作れと言つてくるだろつ。
だが、子どもたちが術なしで生きていけるものを作りたい。」

とティエビスは言つ。

「 その点には協力出来るわ。」

と春田は言つ。

「 でも、全てこれで終わると思つんだ。 あの話と同じになるのだ
つたらな。」

とティエビスは言つ。

・・・・

「 それじゃあここら辺から別れようか。」

と小鳥坂は言つ。

「 そうだな・・・」

と俺は言つ。

「 私もなるべく頑張るわ・・・
と暗い俺の表情を見ていつ。

「 ありがとう・・・」

と俺は言つ。

「 ありがとう・・・」

「ところで、斎藤たちはどうなった……？」
と俺は別れようとしていた小鳥坂に聞く。

「真菜は回復しているみたいわ。でも斎藤に関しては……まだ意識が戻らないみたい。」
と小鳥坂は言う。

俺はその言葉に驚いた。

「そうか……じゃあ行くか……」
と俺はいい2人は戦いへと行く。

・・・・

成田空港管制塔

「大変です。不審な飛行機が着陸の要請をしています。」
と管制塔にいる一人が言う。

「どんな飛行機だ？」
ともう一人が言う。

「ホームページ767だと思われますがそんな便はないはずです。」
という。

「新しい情報が入りました。着陸を今すぐ拒否しないと空港へ突っ込むと……」
ともう一人が言う。

「わかった。とりあえず許可を出せ、そして警察にすぐ連絡だ……」

「

・・・・

「着陸しました。 警察がすぐに向かっています。」
といつ。

「よし、後は他の飛行機の指揮をするんだ。」
と言つ。

ドーーーン

「ば・・・爆発です。 煙がすごいです。」
と一人が言つ。

「大変です、この爆発の煙によつて第2滑走路に着陸する飛行機が
着陸を失敗しました。」
ともう一人が言つ。

「緊急事態発生」

と管制塔室にサイレンが響く。

・・・・

「敵か・・・ 仲間・・・ 敵・・・ 仲間・・・」

と俺はすうとベンチに座つて言つてゐる。

「(やうや、ミーナも心配するよな・・・ 「んな事態になつたら)

「

と思つていた時だつた。

「ザックス・アンドレス ブラックリストの人物を発見・・・」
と突然声がした。

「テ・・・・テイト！？」
と俺は言つ。

- end -

第1-3話（43話）日本対イギリス（前書き）

ども、いつも読んでいただきありがとうございます。
だいぶこの話も最後まで書いてきたんですけど・・・最後の最後が
思いつかない・・・ここからへんぐらいまで順調だけどもしかした
ら最後辺りはしばらく更新がおそらくなるかもされませんが宜しくお
願いします。

この小説に出る登場人物の名前は実際の団体名・個人名とは一切
関係ありません。

今回も小説を読んでいただきありがとうございます。もしよかつたら
評価・感想・お気に入りを宜しくお願ひします。

第1-3話（43話）日本対イギリス

43話

『昨日の成田空港の不審飛行機着陸事件は不審飛行機が着陸した直後大きな爆発音とともに煙を出しました。その煙によつて隣の滑走路で着陸をしようとしていたところ着陸失敗し乗員全員死亡しました。また、不審飛行機は煙が消えたころパイロット・機長は死亡しており機内には誰もいませんでした。警視庁によりますと・・・』

「どうどう来たんだね・・・」

と綾乃是言つ。

「 そ う で す な ・ ・ ・ 」

と巧は言つ。

綾乃たちはマイナビのニュースを見させないようでした。

・・・

・・・

「 テ ・ ・ ・ テイトな の か ・ ・ ・ ？」

と俺は言つ。

「 ・ ・ ・ 」

テイトはこっちを向きながら何も言わない。

「 なあ ・ ・ ・ 田を覚ましてくれよ ・ ・ ・ お前は操られて いるだけ
だ ・ ・ ・ 」
と俺は言つ。

するとテイトはこきなり攻撃をしてきた。

「つち・・・」

俺は攻撃をかわす

「おい！ 俺だよ！ 気づいてくれ！」

と俺は言つがテイトは攻撃を止めない。

「なあ・・・見えてるか・・・」

と俺は言つがテイトは攻撃をどんどん早くしていくばかりだった。

「一緒に旅をしたよな・・・」

と俺は言いながら攻撃をかわしていく。

ザックスは攻撃をかわしていくと後ろの壁まで来てしまった。

「くそ・・・動けないか・・・」

テイトはナイフを手に持ち今でも殺そうとしていた。

「いい加減気づいてくれないか・・・ これは間違つてるんだ。

目を覚ませるのはお前だけだ・・・」

と俺は言つ。

するとテイトはナイフを大きく振り俺の顔を刺そうとした

：

「悪いけど・・・いくら仲間でも仲間のミイナは渡すことが出来な

「いんだ。」

と俺は言いながらテイトのナイフを俺の手で止める。

ナイフが少し手に刺さっていて血が流れていた。

「悪いが許してくれ・・・テイト・・・」

と俺は言つと一発腹に殴つた。

テイトは少し飛んでいく。

「俺だつて辛いんだ・・・でも・・・これはお前じゃない。
操られているだけだ・・・許してくれ・・・」
と俺はいいダークボールをくらわす。

・
・
・

「（こいつらね・・・考樹の仲間は・・・）」

と小鳥坂は思つ。

「お嬢さん、オリジナルパワーの場所を教えてもらひつか・・・」
と言つてくる

「（とりあえず、こいつを倒さなこと・・・考樹・・・由紀・・・
ごめんね）」
と俺は言つ。

「悪いけど・・・教えれないわ・・・私は約束しているから・・・

と小鳥坂はい

「

「サイクロンカード……」
と言い攻撃をする。

と「→攻撃をすNo

「ふつ・・・」んなんじやあめえーんだよーー。と相手は攻撃をしてくる。

「あざわらー！」

相手は風を使つてくる。

「う・・・腕が！？」

とハ鳥坂は

「今度は首が飛んでいいぞ？早く教えないといよ？」

A 3x3 grid of nine black dots arranged in three rows and three columns.

「（大学に行く前に邪魔を処理しないといけないんか・・・）」
と裕太は思う。

「私にオリジンパワーの場所を教えないといいで死にますよ?」
とルメリは言う。

「（しつかし、全員ザックスの仲間なんだよな・・・）殺すわけにはいかないもんな・・・」
と裕太は思う。

「お前は剣術師か・・・」

と裕太は小さい声で囁つ。

「ドーンー！」

裕太は攻撃をするがルメリは剣で弾を止める。

「なかなかやんじやねえか。」

と裕太は囁つ。

「早く教えなさい」・・・」

とルメリは囁つと襲つてくる。

「つふん・・・俺の銃を顔面にくらうんだなーー！」

と裕太は囁つとルメリの剣は急いでかくなつた。

「な・・・何！？」

と裕太は囁つ。

「ぐわああああああああああああああああ

・・・・・

「ぐわああああああああああああああ

と急にミイナは声を出す。

「じつしたのミイナー！？」

と綾乃是すぐに声を掛ける

「ま・・・また・・・・・
とミイナは言つ。

「落ち着いてミイナちゃん。」「
と綾乃是ミイナのところへ行く。

「大丈夫・・・あなたの予知夢は必ず変わるから。あの人たちなら
変えるんだから」「
と綾乃是優しく言つ。

「う・・うん。」「
とミイナは落ち着く。

「ねえ綾乃是・・・・・
G P Sがさつきから動いてないぞ。」「
と透哉は言つ。

「変ね・・・・・
もしかいて・・・・・
と綾乃是言つ。

「動いているのはザックスだけか。」「

・・・・・

「（痛い・・・・・）」「

と小鳥坂は言つ。

「どうしたんだい・・・・・まだ吐かないのかい・・・・・早くしてく
れよ。君の首も切れちゃうんだよー?」「
と相手は言つ。

「いう訳ないじゃない……私は……約束を守るなんていって死んでもいいわ……」と小鳥坂は言つ。

「やつかり……ならば……本当に行かせてもいいやつやないか……」「と相手は言つ。

「（ダメだ……もう体力も少ない……）」と小鳥坂は思つ。

「碎き散れ……やつなら……」と相手は言つと攻撃をしようとする。

「待て！」

と声が聞こえた。

「誰だ？」
と相手は言つ。

「（ザックス……？）」

と小鳥坂は思つ。

「ウイングか……久しぶりだな。」

と俺は言つ。

「ザックス……か……なんだい？」の娘を助けにでも？」と相手は言つ。

「「」もひともだ・・・
と俺は言つ。

「まあいい、」こつは死にかけだ。お前に話を聞こつ。
と相手は言つ。

「俺は仲間だと思わね奴にはそんな大切なことは言えねンだな。
」
と相手は言つ。

「ほお、俺たちを仲間じゃないと・・・?
と相手は言つ。

「やうだな、今のお前らはな。
と俺は言つ。

「なるほど・・・それじゃあ仲間じゃネからお前も碎いていいん
だな?」

と相手は言つ。

「やうこつ」とだ。

と俺は言つとウインズは攻撃をしてきた。

「ザ・・・ザックス!?

と小鳥坂は小声で言つ。

「ウーーーーン!-

辺りは煙です』べなつた

「今はお前を仲間と見ない。だから少しの間Jリで倒れてこぐれ。」

と俺は言つと小鳥坂のもとへと行く。

「大丈夫か！？」
と俺は言つ。

「うん、『あんな。いろいろと迷惑かけて。』
と小鳥坂は言つ。

「お前はどつあえず病院へ行くんだ。それと・・・
と俺は言つ。

「（それと？）」
と小鳥坂は思つ。

「Jの戦争が終わつたら話したいことがあるんだ。だから死ぬんじ
やねえ。」

と俺は言つ。

「（話したいこと？え、なんなの？）」
と小鳥坂は思うが俺は救急車を呼ぶ。

気がつくと小鳥坂は意識を消していた。

「（なんで、こんなことになつてゐるんだ・・・。あいつらもだい
ぶ力を上げてゐる・・・。本当に・・・ミーナを守れるのか・・・。
）」

第1-4話（44話）浅島 奈海（前書き）

この小説に出る登場人物の名前は実際の団体名・個人名とは一切関係ありません。

今回も小説を読んでいただきありがとうございます。もしよかつたら、評価・感想・お気に入りを宜しくお願ひします。
最後の締め方がよくわかりません。

44話

「（ぐはっ・・・）のままじや・・・死ぬ・・・）」
と裕太は思っていた。

裕太の腹には思いつきごと剣が刺さっていた。

「もうそろそろ死ぬときかしら・・・」
とルメリは言つ。

「お前ら・・・本当に強いんだな・・・」

「オリジンパワーのためならなんでもします。」
とルメリは言つ。

「さうか・・・ザックスは・・・こんな奴らの仲間だつたのか・・・
俺はこんな奴らの仲間と友達だつたのか・・・残念だ・・・
と裕太は言つ。

「うるさいー あんたは黙つて血でも流しておきなさいー！」
とルメリは言つ。

「悪いが・・・」んな死に方は嫌だな・・・俺はもう一度・・・

と裕太は言いながら立ち上がる。

「もう一度ー！戦うんだよーーー！」

と裕太は言いながら走つていいく。

「バカ野郎。」

ヒルメリは言いながら剣を構えるが前には裕太が居なかつた。

「バカはどつちだ・・・ ここだぞ、てめえ・・・」

と裕太は相手のすきをみてルメリの後ろへといた。

「なるほどね・・・ それで殺すわけですね」

ヒルメリは言つ。

「ふつ・・・ 約束を一つ破ることになるかもしれないがな・・・」

と裕太は言つ。

「お前に言つても意味ないかもしれないけど・・・ 僕はザックスに・・・ あえて良かつた・・・ ずっと姉ちゃんのことしか思つてなかつたけど・・・ あいつに会つて本当のことを聞いてから今は・・・ とても楽しいんだ・・・ そんな人に会えたんだ・・・ 僕は幸運・・・ な奴だ・・・ できたら・・・ お前らにも・・・ 姉ちゃんと一緒に居てくれて・・・ つて言いたかったんだが・・・」

と裕太は言つ。

「（やばい死ぬ・・・ とりあえず麻酔注射を・・・）」

と裕太は麻酔注射を持ちルメリに刺す

「あつ・・・」

ヒルメリは言つと眠つてしまつた。

「（さてと・・・ 僕も・・・ 終わりか・・・）」

と裕太は思つ。

・・・・

「デイビス教授。 術者たちは3人戦闘不能が確認され相手は残り2人になりました。」

と監視係は言う。

「そうか、残つてゐるのはザックスか?」
とデイビスは聞く。

「その通りです。」

と監視係は言う。

「面白くなつてきたな・・・」

とデイビスは言う。

「あなた・・・やり過ぎじゃないかしら・・・」
と春田はデイビスに言う。

「悪いが、イギリスは子どもたちにどれぐらいの力をつけたかは知
らないからな・・・」

とデイビスは言う。

・・・・

「ザックス! 聞こえる?」

とザックスの無線から聞こえた。

「おう聞こえる。」

と俺は言つ。

「裕太も戦闘不能になつたわ・・・」

と綾乃是殘念そうに言つ。

「そりか・・・」

と俺は言つ。

「とりあえず、ザックスは裕太の代わりに大学へと向かって。」
と綾乃是言つ。

「わかつたそうする。」

と俺はいい大学へと向かう。

すると前から術者が現れた。

「つち・・・術者もいんのか・・・」

と俺は言つ。

「ほらよ、相手してやんぞ。」

と俺は言つと沢山の術者に囲まれていた。

「つち・・・落とし穴にはめられたわけか・・・」

と俺は言つ。

「どうだ! ザックス・アンドレス! ! これでお前も終わりだ。」
と術者狩りは言つ。

ザックスが攻撃をしようとした時だった向こう側から術者狩りが倒れていくのが見えた。

「透哉か？」

と思いとりあえず術者狩りを倒して行った。

・・・

「ふう・・・　だいぶ時間がかかったな・・・」

と俺は言つ。

「ザックス・アンドレスさんですよね？」

と一人の女が言つ。

「ああそうだけど・・・　お前は・・・？」

と俺は言つ。

「あ、私は水術師の浅島あさしま奈海なみです。日本の術師の一人です。」

と奈美は言つ。

「ああ・・・そなのか・・で、なんでここに?」

と俺は言つ。

「今回の話を聞いて助けに来たのです。話は全部綾乃さんから聞いてます。ザックスさんは先に大学へと。」

と奈海は言つ。

「おおそなか・・ありがと。」

と俺はいい大学へと向かう。

・・・・・

イギリス

「ドード様、面接を希望している方が。
」

と書つ。

「誰だね？」

とドードは書つ。

「術師のボスです。」

と書つ。

「さうか、入れるんだ。」

とドードは書つ。

・・・

「久しぶりだな。ドード。」

とボスは書つ。

「やつちこそこ来るとは珍しい。」

とドードは書つ。

「やうだな。ここに来るつもりは無かつたんだが。お前の行動がどうしても気に入らなくてな。」

とボスは書つ。

「まあ落ち着け、これでイギリスも最大の権力を持つことが出来る。・

・・そうすれば・・・」

ヒドードが言つた時

「ふざけるな！……お前はその権力を掴み何をするんだ！ それでイギリスは変われると思つていいのか！？ オリジンパワーを掴んでも権力が掴めれるのではなく軍事力しかつかめないんだ！ 私はそんなものは必要はない。 子どもたちがこれ以上傷つくのは見たくない。 止めてくれ…… 今すぐにこの計画を止めてくれ！」

とボスは言つ。

「そうだな……悪いが今言つたのは全てうそだ。 すまんな。」
ヒドードは言つ。

「どうこういことだ！？」

とボスは言つ。

「オリジンパワーの話を思い出してくれ。 昔、あるイギリスの貧乏な町は大火災を起こしてほとんどの家が全焼し家を建てるために隣の大きな町から多額の借金をする。 借金をした町は街のみんなが頑張つて働いたが農作物は豊富に育たずなかなか借金を返すことが出来なかつた。

そんな町に偶然自称特別な力を持つていてと言つた男が現れる。 その男は町のために雨を降らしたり緑を増やしたり土地を豊かにしたりする力を使い村は借金を返すことが出来た。

隣の村はその話を聞くと割る知恵を働かせてもつとお金を取ろうと思いつ借金が足りていないと言つたのさ、隣町は無理やりこの町からお金を取ろうとした。 この町はお金を返す必要がないと思いつつ返さなかつたら隣町は戦争を起こした。 その男は心が弱く町の人に戦争をしているのを見ると心が苦しくなり悪の顔を見せる。

悪の顔を見せた男は相手見方を関係なく殺し最終的には心をコント

ロールできなくなり世界を滅亡させる力を使つ。そして世界は新しくなつた。

「こうい話なんだが、もちろん知つていろよな？」

ヒデードは聞く。

「それが術の起源と呼ばれている話だろ。」

とボスは聞く。

「そうなんだよ。その通り。もし、この話が本当なら戦争を見たオリジンパワーは心をコントロールできなくなり悪の顔を見せる。

そして・・・」

ヒデードは聞く。

「まさか・・・ こんな話があり得るわけ・・・」

「そうなんだよ・・・ 最初はこんな話誰も信じなかつたよ。でも見つけてしまつたのさ、デイビス・アンドレスは。オリジンパワーをね・・・ 最初はみんな驚いたよ。こんな話が本当だつたなんてありえないんだから。そしたら・・・ 私の仮説もありえなくないのでは?」

ヒデードは聞く。

「ヒデード・・・ 本氣か・・・?」

とボスは聞く。

「僕もそう願いたくはないんだけどね・・・」

- end -

第15話（45話）人類滅亡（前書き）

予定23話ぐらいで終わるつもりです。ていうか終わります。

第3期は・・・話が思いつけばやります。

この小説に出る登場人物の名前は実際の団体名・個人名とは一切関係ありません。

今回も小説を読んでいただきありがとうございます。もしよかつたら、評価・感想・お気に入りを宜しくお願ひします。

第15話（45話）人類滅亡

45話

「デイビス、オリジンパワーの話があつたわよね・・・」
と春田はデイビスに言つ。

「ああ」

とデイビスは言つ。

「今回の事とその話つて似ている点があると思わないかしら?」

と春田は言つ。

「そうだな。そういうことになつてるんだよな

とデイビスは言つ。

「イギリスに帰つてドードを止めた方が?」

と春田は聞く。

「止めたつて無駄さ。あいつが言つことを聞くわけがない。」

とデイビスは窓から外を見ながら言つ。

「それじゃあ、あなたの目標は人類滅亡なの?」

と春田は聞く。

「そういう訳でもない。」

とデイビスは言つ。

「はつきりしてよー!」

と春田は言つと

「俺だつてわからんねえんだよ！！ 俺は・・・俺は・・・オリジンパワーを使えば今までしてきたことをやり直すことが出来るかと思つていた！！ でも・・・でも・・・俺だつてオリジンパワーを奪い合う戦争なんてするはずじゃなかつた。してはいけないんだよ！ だけどもう手遅れだ・・・」

トディイビスは言つ。

「そうね・・・でも、私はこう思つんだ。 あなたの子どもならやつてくれるんじやないかしら？」

と春田は言つ。

「どうじつことだ。」

トディイビスは聞く。

「あの子はあなたとそつくりだから、きっと何か新しい道を導いてくれるわ。大丈夫。」

と春田は言つ。

「やうか・・・」

トディイビスは言つ

・・・・・

俺は術者狩り達に見つからないように大学へと向かつていた。

「はあはあ・・・ 着いた・・・」

俺は大学へ入り春田の部屋へと向かつた。

俺は急いで扉を開けた。

「動くんじゃねえ！」

と俺はいい綾乃に言われたとおりに銃を春田に向ける。

「どうしたのかしら……」

と春田は叫ぶ。

「俺の……俺の親父はどうへ行つた……」

と俺は叫ぶ。

「ああ、さつきまで話してたんだけど ちよつと頭が痛くなつたと言つてどこかへ言つたわ……とつあえずその銃を下ろすつ。

話があるんだ。」

と俺は言われ銃をおろし部屋に入ることとした。

「はい、「一ヒー」

と春田は出す。

「ありがと。悪いが今田は全て俺の質問に答えてくれ。頼む。」
と俺は叫ぶ。

「わかったわ。その代りに私の話もきりと受け止めてくれるかし

ら

と春田は叫ぶ。

「いいだろ。」

と俺は叫ぶ。

「お父さんと返事の仕方がそつくりわね。」
と春田は笑う。

「さうなんか・・・」
と俺は言つ。

「俺の親父は何のために日本へいるんだ。」
と俺は聞く。

「オリジンパワーの力を必要のためよ。でも正確に言つとあなた達
のために来てるんだわ。」

と春田は言つ。

「俺たちのため?ビツビツ?」
と俺は聞く。

「私はそれを本人から聞いた方がいいと想つわ。きっと私が言つて

もあなたは信じないでしょ。」

と春田は言つ。

「わかった。」

と俺は言つと

「それじゃあ次だが・・・オリジンパワーについて詳しく聞かして
くれ。」
と俺は言つ。

「そうね、オリジンパワーの話をあげるわ。」
と春田は言つとオリジンパワーの話をし始めた。

・・・

「戦争？人類滅亡？・・・ どうこうことだ・・・ と俺は聞く。

「オリジンパワーっていうのはね沢山の力を持っているんだわ。まるで神のよう。その中の力の中に悪の顔っていうのがあってその中に人類を滅ぼさせるほどの力があるらしいわ。」

と春田は言つ。

「うそだろ・・・それをミイナが持つてているのか・・・ と俺は言つ。

「残念ながらそうね・・・ 私の研究でも由紀ちゃんがオリジンパワーを持っているのは事実だから。」

と春田は言つ。

「それじゃあ・・・ その悪の顔にさせないにはどうすれば・・・ ? と俺は驚きながら聞く。

「そうね・・・ とにかく彼女には負担を掛けないことだわ。 といつても・・・ 彼女はどうやら未来予知をする術も持つていても負担を掛けないのは無理かもしれない・・・ 」

と春田は言つ。

「じゃあこの戦争を止める」とは――――――
と俺は怒鳴る。

「・・・・・」

春田は黙り込んだ。

「不可能……つてとにかく。」

と春田は叫ぶ。

「そんな……」

と俺は言つ。

「最初あなたにはオリジンパワーを守つ抜きなさい。」と叫んだが

それは撤回させてもひつわ。」

と春田は叫ぶ。

「どうこういとだ?..

と俺は叫ぶ。

「世界を守りたいのならあなたの手でオリジンパワーを殺しなさい。」

と春田は真剣に叫ぶ。

俺は地面に座り込んでしまった。

すると春田は俺を抱きしめ

「考樹君。私はあなたを信じてるわ……あなたがこの未来を導いてくれる人になることを……」

・ · · ·

「集中……集中……戦う」と集中……

と透哉は考えていた。

「よし・・・ ストーンインパクトーーー」「巧は術者狩りに攻撃をしていく。

「これで片付いたか・・・」
と巧は思っていた。

「はいはーい、上等上等」と拍手をしながら向こうから女は歩いてくる。

「（あれ・・・呪われたザックスの仲間たちってこんなにはつきり喋るんだっけ・・・）」「と巧は思っている。

「お姉さんオリジンパワーっていうのを探してるんだけど君は知っているかな？」
と女は話しかけてくる。

「悪いけど、オリジンパワーの場所は教えられないけど・・・」
と巧は言つ。

「やうかい・・・最近の子どもって口が堅いんだね・・・ ならばその口を無理やりあけましょーつ・・・ーーー」と女は言つと巧に襲いかかってきた。

「うわあーーー」

第1-6話（46話）悪の顔（前書き）

この小説に出る登場人物の名前は実際の団体名・個人名とは一切関係ありません。

今回も小説を読んでいただきありがとうございます。もしよかつたら、評価・感想・お気に入りを宜しくお願ひします。

第1-6話（46話）悪の顔

46話

「やうかい・・・最近の子どもって口が堅いんだね・・・ばばその口を無理やりあけましょひ・・・！」
と奈海は言ひつと巧に襲いかかってきた。

「うわあ・・・

キーン

と激しい音がした。

巧の前には2人いた。

「よそ見してたら死ぬところだつたわよ・・・」
と奈海は言ひつ。

「あなたは・・・」
と巧が言おうとすると

「説明は後よ。とつあえず手伝ひなさい。」

と奈海は言ひつ。

「あんた術者狩りでもなくザックスさん達の仲間でもないみたいね。

」
と奈海は言ひつ。

「 そうよ、私はまだ単独でオリジンパワーを手に入れようとしているからね・・・ 」
と相手は言う。

「単独でもグループでも私たちは渡さないから!」
と奈海は言つ。

「なるほどね、その意気込みは気に入ったわ。でもね、そういう訳にはいかないんだ。」

と相手は言つ。

「アノハノマ

相手は攻撃をしてきた。

奈海は避けるが相手は連續で攻撃をしてくる。

「なんで！？」

と余海十書のと

「ぐはつ

攻撃が当たり飛ばされる。

「あんなに強氣だつたのにこんなに卑く死ぬとわね・・・今度はあなたの番よ。どうするかしり?」

と相手は言つ。

「戦う。・・・・もひらん。」

七八〇

「あなたはいろいろと間違つていいわ。戦うんじゃなくて死に行くんだよ?」

と相手は言つとまた攻撃をしてきた。

・・・・

「ザックスさん。3丁目のスーパー辺りで巧さんと奈海さんが何者かと戦っています。」

と綾乃是無線でいづ。

「それはどういふことだ。何者かつて?」

とザックスは走りながら無線に言ひ。

いといづ事です。」

と綾乃是無線でいづ。

「なるほど・・・3つの集団が来ているといづ訳か。」

とザックスがボソッと言つてると

「やうなんだよなあ―――その通りだよ―――頭のいい少年

君―――」

と後ろから声が聞こえ後ろを振り向くと

「おせきーよ

と言ひ相手はザックスの腹を思いつきり殴る。

「つひ・・・・てめえは誰だ・・・・」

と俺は言つ。

「ヒィヒーーー名乗るまじもねえよ。ビツセトメヒは死ぬんだからよ。ヒツヒツヒ」
と相手は言つ。

「俺たちはただの術者狩りでもなくお前の仲間でもねえよ。アメリカの術者だよオーーーー！」

と相手は言つ。

「アメリカ・・・アメリカでも実験があるわけか・・・」
と俺は地面に座り込んでいく。

「余計なこと考えなくとも良いぞオーーー！　すぐに楽にしてやんからよーーー！」

と相手は言つと早いスピードで攻撃をしてくる。

「消えた！？」

とザックスは言つと

「後ろだよ　バーカ！！」

と言つて相手はザックスを思いっきり蹴る。

「なんだよーー！　術者の中で強い力を持つてゐる奴はこんなもんなんかよーー！　俺らより雑魚じやねえか。」

と相手は言つ。

「くつ・・・死ぬ前に・・・聞かせてもらおうか・・・　お前らはオリジンパワーを使って何をするんだ？」

とザックスは倒れこみながら聞く。

「はあ？お前らそんなこともしんねえのか？俺たちは最強の力が欲しいんだよー。」
と相手は言つ。

「やつか・・・要するに自分たちで使つためな・・・」
と俺はそういうと立ち上がる。

「悪いがオリジンパワーを持つてるのは俺の大事な仲間なんだよ・・・」
ザックスは背中から黒い光を出しながら相手に近づく。

「仲間がなんなんだよ・・・ハハハ 今は世界が狙つているものなんだぜ！？ お前の好き勝手にはイカねエンだよ！ー。」
と相手は言つ。

ザックスはどんどん近づいていく。

相手もそんなザックスを見て少しひるんでいる。

「そりなんだよな。俺も勝手にあいつのことを守つてんだよ。誰のためにもネエ。俺のためなんだよ。」
と俺は言つながら相手に近づく。

「ひるせえーこつち来るんじゃネエー。」
と相手はいいザックスを蹴り飛ばす。

しかし、ザックスはもう一度立ち上がり敵に近づく。

「悪いけどオリジンパワーを入手するのはあきらめてくれないかな

？ねえ？

と俺は相手の後ろの肩をたたく。

「何ー？体が・・・体が動かない・・・
と相手は言つ。

「影・・・出でますよ。」

と俺は叫つ

「残念だな。」

と言いダークインパクトを至近距離でへりわす。

「ぐはつ・・・
と相手は言つ倒れこむ。

・・・・・

「さてと、お姉さんも時間がないから・・・やんや殺させてもらひ

うわ。」

と相手の女は巧に言つ。

「よつぽどオリジンパワーが欲しいんだね。」

と巧は言つ。

「やうよ・・・やの通りよ。」

と相手の女は言つ。

「でも、僕たちを倒してからじでくれないかな？」
と巧は言つ

「僕たちへ。

と相手の女は言つ。

「もうよ、私達よ。」

と奈海は相手の後ろから言つ。

「…？」

「ファイヤーインパクト…」

と巧は言つ

「ウォーターラインパクト…」

と奈海は言つ。

「ええああああああ」

と言しながら相手は倒れこむ。

「ふう・・・ヒツアエズ付いたか・・・」

と巧は言つ

「えつと・・・あなたは・・・」

と巧は聞く。

「奈海よ、水術者。 といつあえず、話は聞いているわ。

と奈海は言つ。

「せうか、俺は巧つてこつんだ。 一応炎術師だ。」

と巧は言つと

「ふふふつ・・・炎と水つて相性悪いよね・・・」

と奈海は笑いながら言つ。

「まあ そうだよな・・・・」
と巧も笑いながら言つた。

イギリスの会議にて

「そうだ。この国も滅亡するんだぞ？」
ともう一人の男も言う。

「お前らは勘違いしているな・・・誰も人類が滅亡する方向に行くとはいっておらんぞ?」

ルノアリ

「しかし、お前が戦争を止めないとこにはそういう運命になるんだ。わかつてゐるだろ？」

「まあこのことはオリジンパワーの話を最後まで知っているやつじやないとわからないな。」
「ドードは言つ。」

A 3x3 grid of nine black dots, arranged in three rows and three columns.

ボスはドードのところを後にし帰つとしていた。

「（ドードー）本当に信じていいのか……そんなことを……）」
とボスは思っていた。

「あの……すみません。」
とボスの後ろから声がした。

「おお、つオラか……」
とボスは叫び。

「あの……本当に」めんなさい。」
とリオラはボスの前で座りこみ叫び。

「ああ……あの件か……」
とボスは叫び。

「僕は……本当は……あるつもりなんて……」
とリオラが叫びと
とボスは叫ぶ。

「いいんだ……わかつてこる……」
とボスは叫ぶ。

「きっとザックスなうひつてくれる……」
とボスは叫ぶ。

・
・
・

この日は全員一回綾乃の家のショルターに集まる日だった。

「みんな2日間お疲れ様。」

と綾乃是言いながらお茶を出す。

「ああありがとう。」
とみんなは言う。

全員テーブルに座ると綾乃是話し始めた。

「とりあえず、今は小鳥坂さんと裕太が重症のため病院に運ばれているわ。裕太は意識を戻したけど小鳥座さんに関してはまだ意識が戻っていないわ。」

と綾乃是言う。

「やうなのか・・・」
とザックスは小声で言う。

「病院にはたくさんの警備が配置されているから大丈夫だと思われるわ。」

と綾乃是言う。

「それで、ザックスさんと巧さん達がアメリカの術師と会ったのよね？」

と綾乃是聞く。

「そうです。」
と巧は言う。

「アメリカの術師は多分もう出てこないと思うわ。アメリカの術師を調べてみたけどそんなに人数がいないしみんな歳を老いでいるみたい。」

と綾乃是言う。

「なるほどな。」
とみんなは言つ。

「そして、ザックスさんの仲間は全員で10人。その中で戦闘不能なのは5人まで行ったわ。」
と綾乃是少し残念そうに言つ。

「ああ、みんな・・・あんまり気にしなくていいからな・・・」
とザックスは言つ。

「うん、あと術者狩りも人数が減つてているみたい。」
と綾乃是言つ。

「じゃあ次の集まる日は一日後ね。」
と綾乃是言つとみんなはまた戦いへと戻つていった。

・・・・

「悪の・・・顔か・・・」
とザックスは少し考えていた。

- end -

第17話（47話）寸前（前書き）

この小説に出る登場人物の名前は実際の団体名・個人名とは一切関係ありません。

今回も小説を読んでいただきありがとうございます。もしよかつたら、評価・感想・お気に入りを宜しくお願ひします。

第17話（47話）寸前

47話

俺はなんとなく自分の家へと帰つて一人考え事をしていた。

自分の家が一番落ち着くからだ。

「オリジンパワーを取り合つ戦争か・・・そんなために犠牲者を出すなんて・・・」

と俺は思いながらなんとなくテレビをつけてみた。

『現在都内では暴動が起きているため避難勧告が出ています。また捜査に出ていた警察はほとんどが行方不明になつています。そして、成田空港の事件に関しては飛行機がイギリスから来ていることが分かりましたが犯人などは不明です。・・・』

「暴動じゃねえよ。」

と俺はニュースを見ながら思つていた。

「さてと、行くか。」

と思い俺は外へ出た。

「（そりいえば、あの時は外に出たらたくさんの術者狩りが待ち伏せしてたよな。）

と思つていたが今は誰も居ない。

町を歩いているとコンビニや店は全部営業を中止していて真っ暗になつていた。

「（信じていろって……俺の何を信じていろんだよ……）
と心中で思っていた。

すると前から誰かが歩いてきた。

「（あれ……なんか見覚えがある……）」
と思っていた。

「久しぶり、ザックス。」

と前から歩いてくる人が声を掛けってきた。

「そ……そな……キリヤ……！？」
と俺は思っていた。

「（いくらなんでもあんなに力を上げているキリヤに勝てるわけが
……）」
と思っていた。

「もちろん……お前もオリジナルパワーを狙っているんだろ……
と俺は聞く。

「やうだよ。それが目的で来てるんだよ。」
とキリヤは言つ。

なぜストーレートに言えるのかと考えていた。

「私は……戦つもりは無いよ……だから場所を教えて……
とキリヤは言つ。

すると無線から

「ザックス……大変！他のみんなが同一人物に殺されているみたい……気を付けて。」
と綾乃是無線でいう。

「もう会つてんだよ……」

と俺は応答する。

「なあ……キリヤ……思い出してくれないか……ミイナと一緒に旅をしたよな？」
と俺は聞く。

「『』めんね、今の私は思い出せれないんだ。」

とキリヤは言つ。

「そうだよな……でも話だけは聞いてくれ。俺たちは旅の途中、ミイナは助けを求めながら俺たちのところへ来たよな……それでミイナの父さんを助けるとき俺が倒れかかっていたよな……その時助けてくれたのはお前じゃないか……」
と俺は言つ。

「だから……『』の私はあの時の私じゃないの……」
とキリヤが言つと

「そのお前のどこかにあの時のお前はいねえのかよ……」
と俺は言つ。

「うるさい……殺すわよ……」
とキリヤは涙を浮かべながら言つ。

「お前が戦つのなら……俺も戦つわ……と俺は言つ。」

「……时空変動……时空変動……吹き飛ばし……とキリヤは言つとザックスを吹き飛ばす……」

「（ひち・・・叶にそつなあこじじゃねえな）」「と俺は思つ。」

「ダークインパクト……」

「俺は攻撃をすると

「时空変動……攻撃封じ……」

「ここにキリヤは攻撃を止める。」

「やして时空変動……サイクロン……」

「ここにキリヤは勢いを強くしザックスを飛ばす。」

・・・・・

「残りはザックスさんだけか……もつあぐいに来るのかな……」

「と綾乃是ぼそつと言つてた。」

「するとミーハが動いているのを綾乃是見た。」

「（ど）行くのミーハちやん！？」

「綾乃是言つ。」

「これからは神からの悪の力を使用し人類に罰を下^{オリジナルパワー}れる儀式に入る。

「ミィナは言ひへ。

「おい、ミィナー、どうしたんだよ？」

と透哉も言ひ

すると氣づいたら綾乃と透哉は意識を失い倒れこんでいた。

ミィナは扉を開き外へ出でこぐ。

・・・・

「ドード様！大変です。どうどうオリジナルパワーが動き出しました！」

と一人が言ひ。

「やつか・・・

とドードは言ひ

「わの長くはないんだな。」

ヒュー^{ヒュー}は小さな声で言つた。

・・・・

「キリヤ・・・やつぱり思い出してくれないか・・・
と俺は言ひ。

111

キリヤは無事になつた。

「これがあなたの最後よ・・・ 時空変動・・・ 肉碎き・・・」
というとキリヤは攻撃をしてくる。

「（こ）んな技を・・・つかえたのか・・・？」

とサッケスは思つてゐると辺りは煙で前が見えなかつた。

「はつ・・・ザツクス・・・何をしてるの私は・・・どうして・・・

• ၁၁၁

とカリヤは小さな声で言つた。

煙が消えるとキリヤの田の前にはザックスが居た。

「テ・・・テイクオーバー・・・?」

とキリヤは言う。キリヤ達にかけられた呪いが解けたのだ。

するとテイクオーバーをしたザックスはキリヤに襲ってきた。

「や・・・やめて・・・ 時空変動・・・攻撃封じ・・・ダメだ・・・

・ 効かない ・・

七八九〇年

「...」
...」

とギリヤはいい術が使えなくなつた。

「ズッカス！！！聞こえて！！！」

と襲いかかっていたザックスが急に停まつた。

するとザックスはテイクオーバーを戻し

「ミ・・・・ミイナー!?」

とザックスは言つ。

・・・・・

大学

「春田・・・どうやら事態はもつと変わったようだ。意外とあの時
が早く来たみたいだ。」

とデイビスは言つ。

「そりか・・・もう行つても遅いよね?」

と春田は言つ。

「あなた・・全く息子と会つたことがないの・・・?」

と春田は聞く。

「そうだな・・・」二十数年は・・でも俺は父親失格だ。息子を実
験に使つてしまふぐらいだ・・・」

とデイビスは言つ。

「そうね・・・でも私は信じてゐるわよ。あの子を。もしお話し通
りに全て進んだらあなたは父親失格じゃないかもしれないわよ?」

と春田は言つ。

「どうこうことだ?」

とデイビスは言つ。

「とりあえず、あなたの息子を信じなさい。それが父親であるため
じゃないかしら？」
と春田は言つ。

・・・・

「ミ・・・・ミイナ・・・なんでお前がここに？」

と俺は声を掛ける。

俺とキリヤは陽が沈む中道の真ん中で戦つていた。

俺がテイクオーバーをした時はもうキリヤ達の呪いは解けていた。

「これから人類がオリジンパワーに反する行動を私に見せつけたこ
とにより人類に罰を与える。」

と悪の顔を見せたミイナは言つ。

「（…これが悪の顔…？）」

と俺は思つ。

綾乃との無線も切れていた。

「おい！オリジンパワーがいたぞ！！」

と一人の術者狩りが見つけ言つとたくさん術者狩りがやつてきた。

「よし！すぐに殺せ！！」

ともう一人の術者狩りは言つ。

「（…殺す！？）

とこう言葉に俺は反応した。

「儀式を邪魔する者は全て抹殺する。」

ミーナは言うと飛び込んだ術者狩りは消えて行った。

「（消えたー？）」

と俺は思つ。

「お前らー飛び込めー！」

と一人の術者狩りが言ったくさんの術者狩りがミーナのところへ向かつのを止めようとした。

「（）のままじゅ世界が・・・」
と俺は思い術者狩りがミーナ達のところへ向かつのを止めようとした。

「てめえーーー！動くんじゃねーー！」
と俺は術者狩りに言つ。

すると術者狩り達はいったん止まつた。

「おめえーーー・・・ 今のオリジンパワーに叶つと思つてんのかよ

！－！」
と俺は言つ。

「（）のままじゅ・・・（）のままじゅてめえーーーは死んでもいいのか

！－！」
と俺は言つ。

キリヤは何も知らなかつたからただ見てることしかできなかつた。

· e n d ·

第1-8話（48話）別世界（前書き）

この小説に出る登場人物の名前は実際の団体名・個人名とは一切関係ありません。

今回も小説を読んでいただきありがとうございます。もしよかつたら、評価・感想・お気に入りを宜しくお願ひします。

48話

あらすじ

ミイナがオリジンパワーを持つていることを知つてから術者狩り達は全員目的をオリジンパワーに変えイギリスはザックスの仲間だつたキリヤ達を呪い日本へ送つた。ザックスは大学の春田からオリジンパワーに負担を掛け過ぎると人類・世界が滅亡すると聞かされミイナには負担を掛けないようにした。しかし、キリヤとザックスが戦つている途中にザックスの目の前にミイナが現れた。ミイナはその時から悪の顔という真のオリジンパワーの顔を見せていた。

「このままじや・・・このままじやてめえーらは死んでもいいのかよー?」

と俺は言つと術者狩り達は

「わかつてゐよー! だけどこれが俺たちの使命なんだよ! 命まで変えて術を手にしオリジンパワーを手に入れるんだよー! てめえーには何も分からねェよ!」

と術者狩りは言つとミイナに襲いかかつていつた。

「うひあああああ!」

と術者狩り達はミイナに襲いかかる。

「てめえらの・・・てめえらの好きにはさせねえんだよー! と俺は言つとテイクオーバーを再びする。

「な・・・何? テイクオーバーだと・・・」

と術者狩り達は言つ。

術者狩り達はテイクオーバーの闇の光によつて弾き飛ばされる。

「（す）こ・・・じんなに強いテイクオーバーは初めてかも・・・」

「キコヤは思つ。

「おこ、てめえーら 使命だらつがなんだらつがしらねえが・・・
簡単に命を捨てるんじゃネエ。」

と俺は言つ。

・・・

「テイビス。最後に息子の顔を見せなくていゝのかしら?」
と春田は言つ。

「いいんだよ。あいつは俺のことを思つていらないだらつ。何も。ま
しては一緒にいた記憶なんてある訳がない。」

とテイビスは言つ。

するとドアのノックがする音がした。

「どうだ。」

と春田は言つ。

「警視庁の増田だ。テイビス・アンダレスそして春田 南に17年
前の体内実験を行つたことにより逮捕状が出でてる。署まで来ても
いい。」

と北海道に居た増田は言つ。

「ナウよね・・・逮捕されるのも当然よね。」

と春田は増田に声を掛ける。

「悪いがいくら兄弟でもこれだけは見逃せれない。デイビス・アンドレスについてはイギリスからも逮捕状が出てこる。イギリスのドードも逮捕された。」

と増田は言つ。

「そりか・・・これからは刑務所での生活か・・・
とデイビスは言いながら手錠をかけられる。

・・・

俺は術者狩り達を全て排除しこの場にはミイナと俺とキリヤだけになつた。

すっかりと陽が沈んで暗くなつていた。しかしミイナから出ている黒の光は街灯に灯されはつきりと見えていた。

「ザックス・・・ 私を今まで守つてくれてありがとう・・・でも・
・・・ これだけは自分でも止められないんだ・・・だから・・・だか
ら・・・」
とミイナは言つ。

「今は何も言わなくていいんだ。何も考えなくていい。
と俺は言つがミイナからの返事はなかつた。

「ねえザックス？これって……」
とキリコヤは言つ。

「もうだな……」の時が来てしまつたんだ。
と俺は言つ。

俺はミイナを二三で殺すべきか行き残すべきか……いや、銃で殺
そつが術で殺そつが今のミイナには敵う訳がない。ならば何をした
ら世界は助かる？世界が助かつてもミイナは助からないのか？それ
ならどっちを選べば……

と俺は思つていた。

「人類に罰を下さるまで5分」
とミイナは言つ。

「くそ……」

と俺は言つと静かにミイナに銃を向ける。

ミイナは少し目を丸くして銃口を見ていた。

「ザックス？何をしてるの……？」
とキリコヤは言つ。

「これが……最終手段だ……」

と俺は言つ。

「え……何言つてんの……」
とキリコヤは言つ。

「つるせえんだ。これが俺の決めた道だ。お前は何もわからねえんだ。」

「うう。」「と俺は言つた。

「ミイナ……すまん……」
と俺はいい一歩き金を引こうとしたときキリヤが俺を思いつき蹴つた。

「ぐはつ……」

と俺は倒れこむ

するとキリヤがやってきた。

「あんた……私に言つたわよね？私が呪われているとき……
あれ本当のことと言えば演技だったのよ。あんたがミイナのことを
どう思つているかを確かめるためには。私に言つたわよね？ミイナ
は私達と一緒に旅をしてきた仲間だって。そんな仲間をここで殺す
つもりなの？」
とキリヤは言つた。

「……」

ザックスは黙り込む。

「もう、ミイナは戻らないかもしない……ここで人類は滅亡す
るかもしれない……私はこれが一番いい選択肢だと思つわ。」
とキリヤは言つた。

「罰を『えるまで3分』
とミイナは言つた。

「最悪な人生の終わり方だつたけどあなたに会えてよかつたわ。」
とキリヤは言う。

「だつて一緒に旅してきた仲間なんだから。」

「罰を下されるまで2分」

「みんながひどいよ・・・・」

「瞼を下げるまで30秒」

「いや、ううかウントダウンも悪くないわね。」
と言しながらキリヤはザックスを抱きしめた。

「これで儀式を終了する。これから罰を与える行動を行う。」
とミーナは言つ。

と俺は叫ぶと辺りは黒い光で色まわ何も見えなくなってしまった。気が失っていた。

前は何も見えない・・・誰も見えない・・・

•
•
•
•
•

•
•
•
•
•

・・・・・

「（えうか・・・俺は天国にいけんのかな・・・またマリと一緒に生活あるじができるのかな・・・そんな生活も悪くねえかもな・・・俺はこれからどうなるんだらう・・・）」

・・・・・

「」・・・」

と俺は田を見ます

「せうか・・・やはり死んだのか・・・と俺は小さな声で言つてみた。

辺りが少し見えるようになつた。

するとそこは建物が壊れていたりしてたくさんの遺体が転がつていた。

もう朝だつた。

「天国つてこんなにグロかつたか？」
と俺は疑問に思つ。

すると俺の田の前にキリヤとミーナが倒れこんでいた。

「なんでだ・・・どうなつてゐんだ・・・」

と俺は思つ。

俺は急いで2人のところへ行つた。

キリヤはあまり息を確認することが出来なかつたが確かにキリヤだ。そしてミイナはまだ少し頑張つて呼吸をしている。

「ミイナ・・・ミイナ生きてるのか?? ミイナ!!」
と俺は必死に叫ぶが何も答えてくれない。

「そりか・・・俺は死んでいないのか・・・多少傷跡が痛むが・・・
まだ動ける・・・」
と思いアスファルトが割れかけている道を走る。

「（確かに・・・綾乃の家はここらへんに・・・）」
と綾乃の家へと向かつていつたが地下シェルターの入り口が完全に壊れていて入ることが出来なかつた。

「ダメだ・・・開かない・・・」
と俺は思い次の場所へ行く。

今度は裕太たちがいる病院へと向かつた。

しかし病院はほとんどが崩れていてこれでは探しようがないと思つた。

「世界には・・・俺一人しかいないのか・・・ここには俺一人しかいないのか・・・」

と俺は思つていた。

「どうすればいいんだよ！！俺はこれから一人でどうすれば…！」
と俺は思いながら地面に座り込んだ。

俺は行く場所もないからとりあえず家へと向かつた。

家もほとんどが崩れていて何もなかつた。

「住む場所もねえのか・・・」
と俺は思いながら歩いていた。

すると突然雨が降ってきた。

雨が降つてきたり歩いている途中に少し残つてゐる建物があつたからそこで雨宿りすることにした。

「水もでねえか・・・」

と俺はその建物にあつた蛇口を開いてみるが泥水しか流れてこなかつた。

「これじゃあ死ぬことになりそうだな・・・」
と俺は思い椅子に座っていた。

もかわん電気なんて通つていないからテレビなんてつかない。

A 3x3 grid of nine black dots, arranged in three rows and three columns.

辺りは真っ暗になつた。

電気もないから建物の中は真っ暗で何も見えない。

ぼーっと空を見ていた。

「みんなはどこへ行つたんだ・・・」

と俺は思つてこると急に空へと光の玉が遠くから飛んでいくのが見えた。

「光の玉・・・」こななみ光がないはずだが・・・

と思つていたら急にふとあることを思い出し俺は走つていつた。

- end -

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n7509x/>

ダークマジシャン-2nd stage-

2011年11月22日13時54分発行